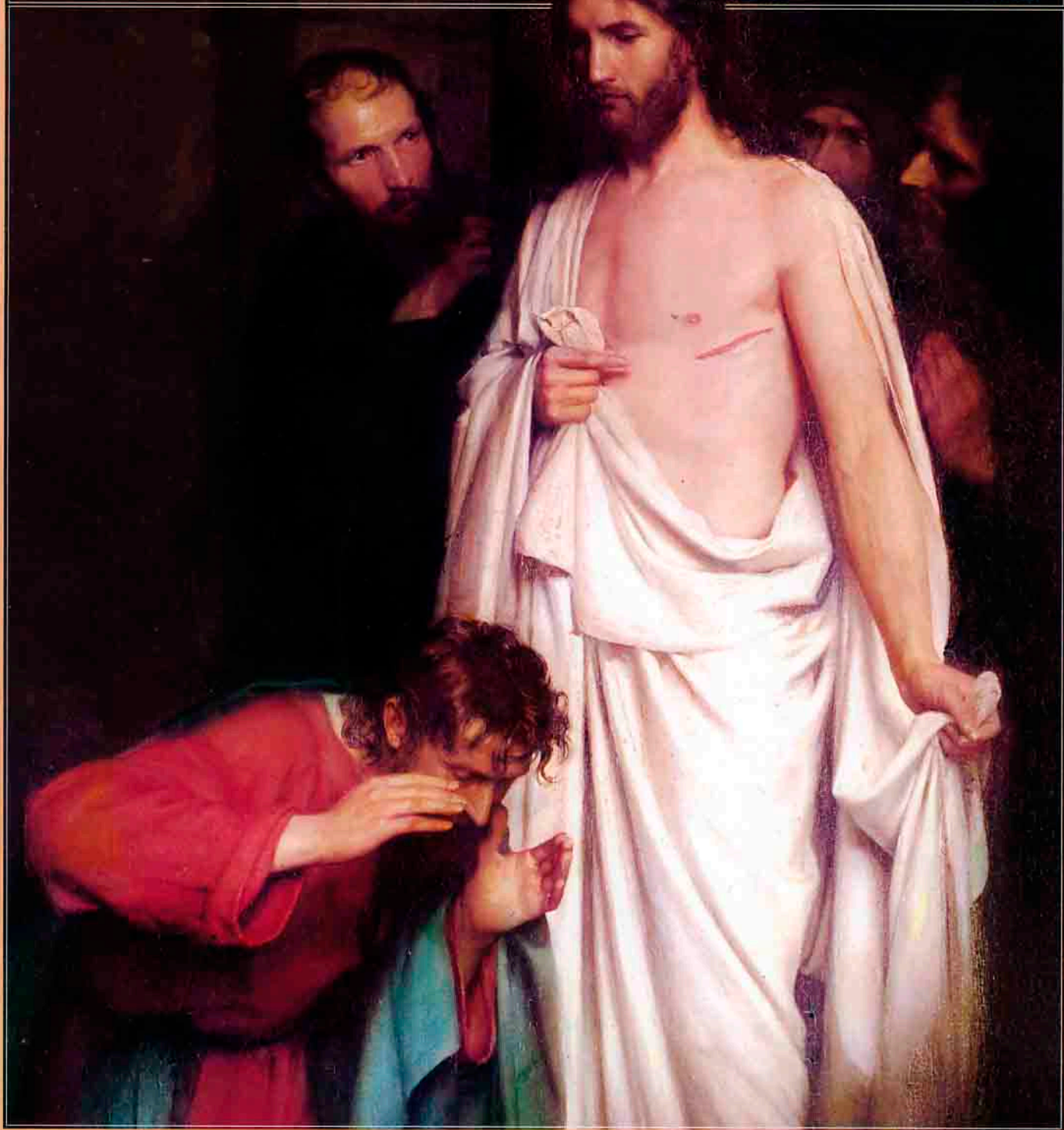


1989
4

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1989年4月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月間——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット
顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リー、キース・W・ウィルコックス
編集長：ヒュー・W・ピノック
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン
編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集主幹補佐：アン・レムリソン
編集主幹補佐／こどものページ：
ディエーン・ウオーカー
アート・ディレクター：M・マサト・カワサキ
デザイナー：シェリー・クック
制作：シドニー・N・マクドナルド、レジナルド・J・クリステンセン、ジェーン・アン・ケンプ、ティモシー・シェパード、スティーブン・ディトン
配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1989年4月号第33巻第4号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351
印刷所 株式会社 精興社
定 価 年間予約／海外予約2,200円（送料共）
半年予約1,100円（送料共）
普通号150円、大会号350円
International Magazine PBMA 8904JA
Printed in Tokyo, Japan.
Copyright © 1989 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.
●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替（口座名／末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号／東京0-41512）にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-440-2351（代表）●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1／末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎0427-96-2820

The *Seito no Michi* is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito no Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

●—もくじ

大管長会メッセージ

「ナザレから、なんのよいものが出ようか」	トーマス・S・モンソン	2
街角で見つけた一冊の本	マービン・K・ガードナー	7
「完全な日」のチャレンジ	ブレンダ・プロクサム・ハント	10
母親としての務め	バーバラ・W・ウインダー	15
聖徒と共に涙を流す	グレン・L・ペイス	18
成就した祝福	スタントン・マクドナルド	25
寛容——キリストのごとき愛に至る道	アン・N・マドセン	27

家庭訪問メッセージ

すべての教会員は宣教師		31
障害者への援助	カーメン・B・ピングリー	32
あなたは正しいことをしているのです	ジュリー・ハウィラー	37
質疑応答 幼児の命名と祝福	スーザン・イーストン・ブラック	38

青少年のページ

みたまが奏でる曲	ベッキー・トーマス	40
信仰の眼	ロバート・B・ハーバートソン	43
私が選んだ本	ロバート・エベリー・グレイ Jr.	48

各地のたより

子供のページ（別冊付録）

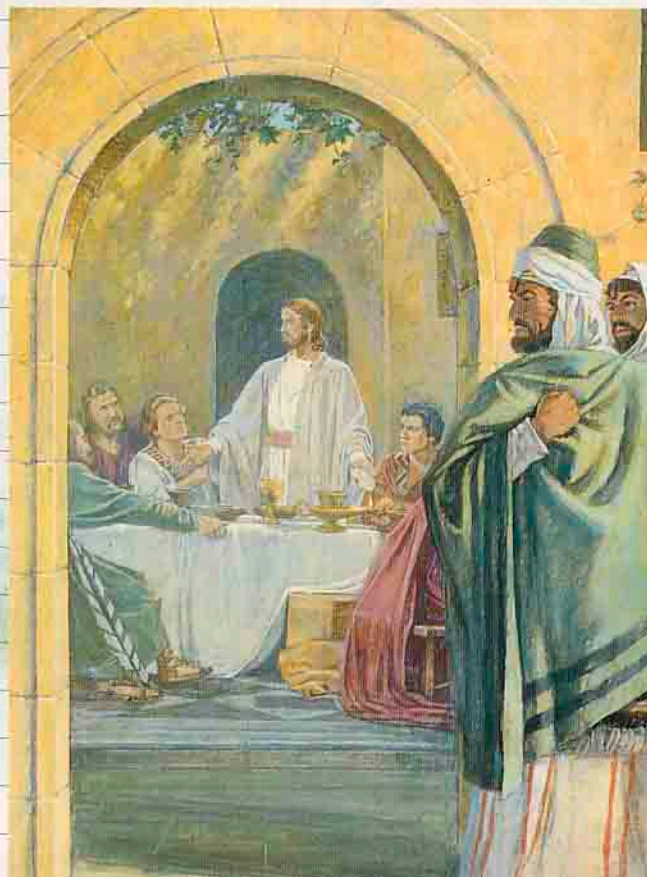
ジョセフとオリヴァ、神権をさずけられる		2
ハンガップのおいおい	ベルナディーン・ベイティ	4
友だちから友だちへ		
マイカリーン・P・グラスリ	サンドラ・スターリングス	6
おもちゃばこ	ロバート・フェアラール	8



表紙——「疑い深いトマス」カール・ヘンリック・ブロック作。

Original at the Chapel of Frederiksborg Castle, Denmark.

©The Photo Source.



「ナザレから、 なんのよいものが出ようか」

第二副管長

トーマス・S・モンソン

約 2千年前に人の子が降臨された世界は、今と同じように、緊張と悲しみに満ちあふれた世界でした。ローマ軍がパレスチナを征服し、エルサレムを陥落させてから、すでに63年の月日が流れていました。そして、パレスチナの至る所に、軍旗をかざし、甲冑^{かっちゅう}、剣で身を固めたローマ兵が進駐していました。

予言者イザヤがああすばらしい宣言をしてから、何代も過ぎ去っていました。

「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。……」

まつりごとはその肩にあり、その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる。』（イザヤ7：14；9：6）

このすばらしい約束を知っている人なら、ピリポが世の救い主から「わたしについてきなさい」と言われたときに感じた無上の喜びをよく理解できるのではないのでしょうか。王の王、主の主が地上に来られたのです。

このようなすばらしいおとずれを自分の内に秘めておくことはできません。ベツサイダのピリポもその例外ではありませんでした。「このピリポがナタナエルに出会って言った、『わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った。』」

ナタナエルは彼に言った、『ナザレから、なんのよいものが出ようか。』ピリポは彼に言った、『きて見なさい。』（ヨハネ1：45-46）

ナザレは、ユダヤすなわちローマの征服地の中でも忌み嫌われた属州にある小さな村でした。山に囲まれた小さなこの村、人々に最も軽んじられていたこの小さな村に、いったいどのような誉れがあったのでしょうか。

ナタナエルと一緒に、それを確かめてみましょう。

エルサレムから128キロ離れた所に位置するナザレは、ダマスコとガリラヤの町々と地中海沿いの町アクレを結ぶ重要な交易路上にありました。しかし、ナザレが人々に知ら

れるようになったのは、そのためではありません。また、美しい眺望のゆえでもありません。ナザレはそれらの交易路や眺望の美しさなどをはるかに超えた、永遠の意味を持つきわめて重大な出来事があった場所なのです。

あるとき、神はガリラヤの小村ナザレに天使ガブリエルを遣わされました。そしてガブリエルはマリヤという名のおとめにく宣言したのです。『恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。』

見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。

彼は……いと高き者の子と、となえられるでしょう。』（ルカ1：30-32）

幼な子イエスの誕生、エジプトへの逃避に続く出来事が、聖書には次のように記録されています。「ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちによって、『彼はナザレ人と呼ばれるであろう』と言われたことが、成就するためである。』（マタイ2：23）

ナザレにおいて、幼な子イエスは「ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛され」ました。（ルカ2：52）

ナザレから出た幼な子イエスは盲人の目を開け、足の不自由な物乞いに歩く力を与え、死者を生き返らせたお方です。イエスは私たちが従うべき完全な模範を示し、完全な生涯を送られました。そして世界を変える喜びのおとずれを教えられたのです。ナザレからどのようなよいものが出たのかを知るために、そのすばらしい出来事一つ一つについて、もっとよく調べてみましょう。

最初にイエスご自身も語られたことのある、ひとりの人物に目を向けてみましょう。イエスはその人について「女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった」（マタイ11：11）と言われました。しかし、自分よりも大いなるお方が来ることを知っていたヨハネは、「道をまっすぐにする」仕事に自分自身を捧げました。

バプテスマのヨハネ以前の時代には、霊的な意味において彼の先祖ともいえる数多くの予言者がいました。しかし、ヨハネは予言された光を目にし、証する最初の者になると定められていました。

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。」(マルコ 1 : 9)

「ヨハネはまたあかしをして言った、『わたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。』」

わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、「ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たなら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである。」

わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである。』」(ヨハネ 1 : 32-34)

ナザレのイエスはみずからは完全なお方であるにもかかわらず、バプテスマを受け、すべての人々に模範を示されたのです。

次にユダヤに目を向け、生まれながら盲人だったある人の証を調べてみましょう。彼はひと筋の光もない、やみの世界しか知りませんでした。やみから光の世界へ移った彼についての話を読んでみましょう。彼の目が開かれたことを知った近所の人々は驚くばかりでした。『「この人は、すわってこじきをしていた者ではないか。」』

ある人々は『その人だ』と言い、他の人々は『いや、ただあの人に似ているだけだ』と言った。しかし、本人は『わたしがそれだ』と言った。

そこで人々は彼に言った、『では、おまえの目はどうしてあいたのか。』

彼は答えた、『イエスというかたが、どろをつくって、わたしの目に塗り、「シロアムに行って洗え」と言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。』」(ヨハネ 9 : 8-11)

どうしても信じようとしなない人々に、「神に栄光を帰するがよい。あの人が罪人であることは、わたしたちにはわかっている」と言われ、彼はこう答えました。「あのかたが罪人であるかどうか、わたしは知りません。ただ一つのことだけ知っています。わたしは盲人であったが、今は見えるということです。」(ヨハネ 9 : 24, 25)

ナザレのイエスは盲人の目を開かれました。

今度はベツレヘムへ行き、38年もの長い間自分の足で立つことができなかつたにもかかわらず、歩けるようになった人について調べてみましょう。聖書にはこう書かれてい

ます。「イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に『なおりたいのか』と言われた。」

いらだちと望みが入り混じったこの人の求めに対し、イエスはやさしく、しかし、厳かに命じられました。「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい。」(ヨハネ 5 : 6, 8)

ナザレ人イエスは病める人々の肉体に新たな力を与えられたのです。

こうしてナザレ人イエスは盲人の目を開き、足が不自由な人々に歩く力を与えられました。しかし、死んだ者を生き返らせたという話は真実なのでしょうか。

あるとき、カペナウムの会堂司ヤイロが主のみもとに来てこう言いました。「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください。」ところが少しして、「あなたの娘はなくなりました」という知らせが届きました。イエスはそれを聞くと、「恐れることは無い。ただ信じなさい」と答え、涙にくれる人々を後にして会堂司の家へ入っていきました。そして、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」と言われたのです。

子供は死んだものと信じきっていた人々はイエスをあざ笑いました。イエスは彼らを外に出し、子供の手を取って言いました。「少女よ、さあ、起きなさい。」

「すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。……彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。」(マルコ 5 : 23-43)

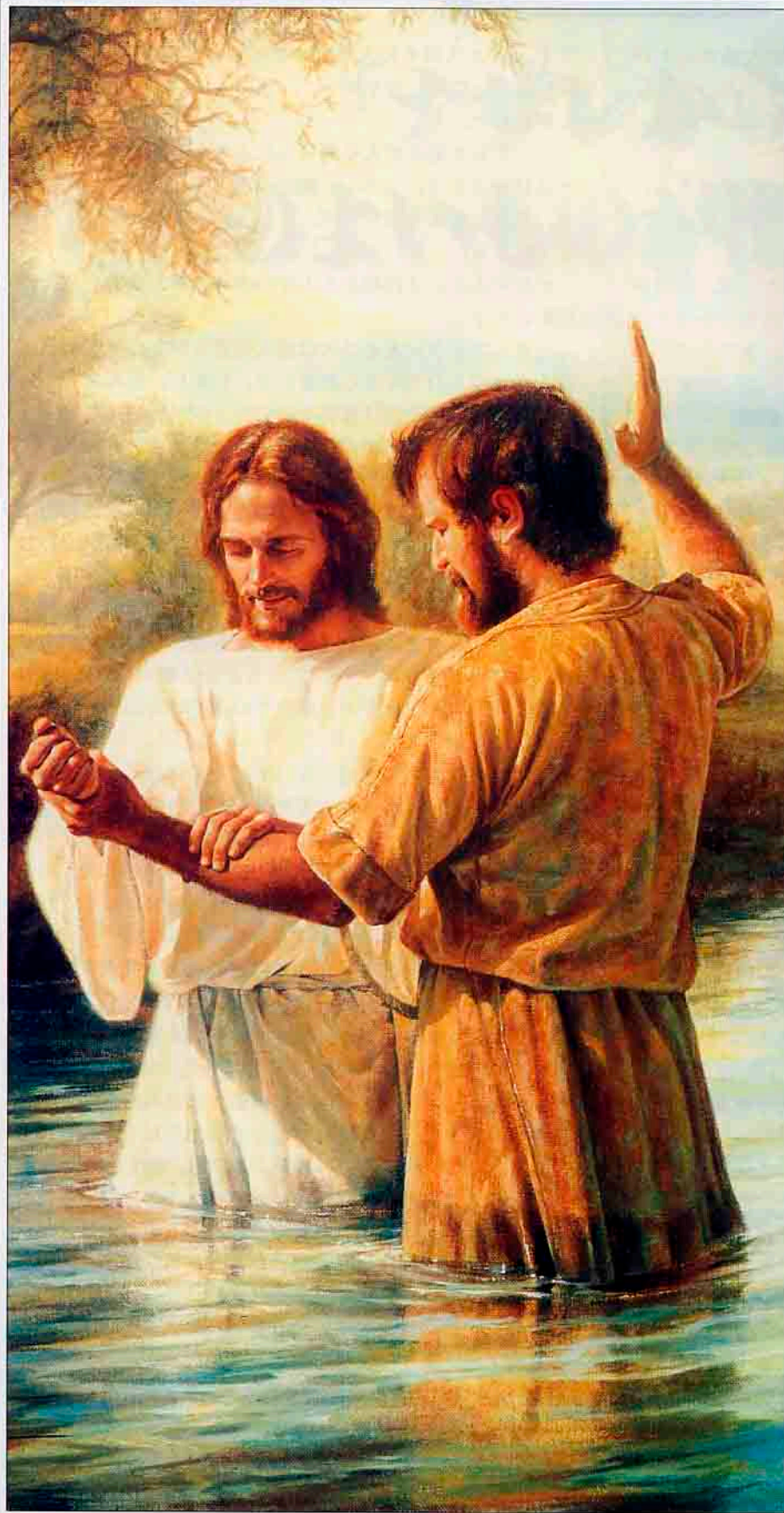
ナザレ人イエスはこうして死んだ者を生き返らせました。

そしてこの奇跡は、「恐れることは無い、ただ信じなさい」(マルコ 5 : 36) という、私たちの生活を実り豊かなものにしてくれる完全な原則を示しています。

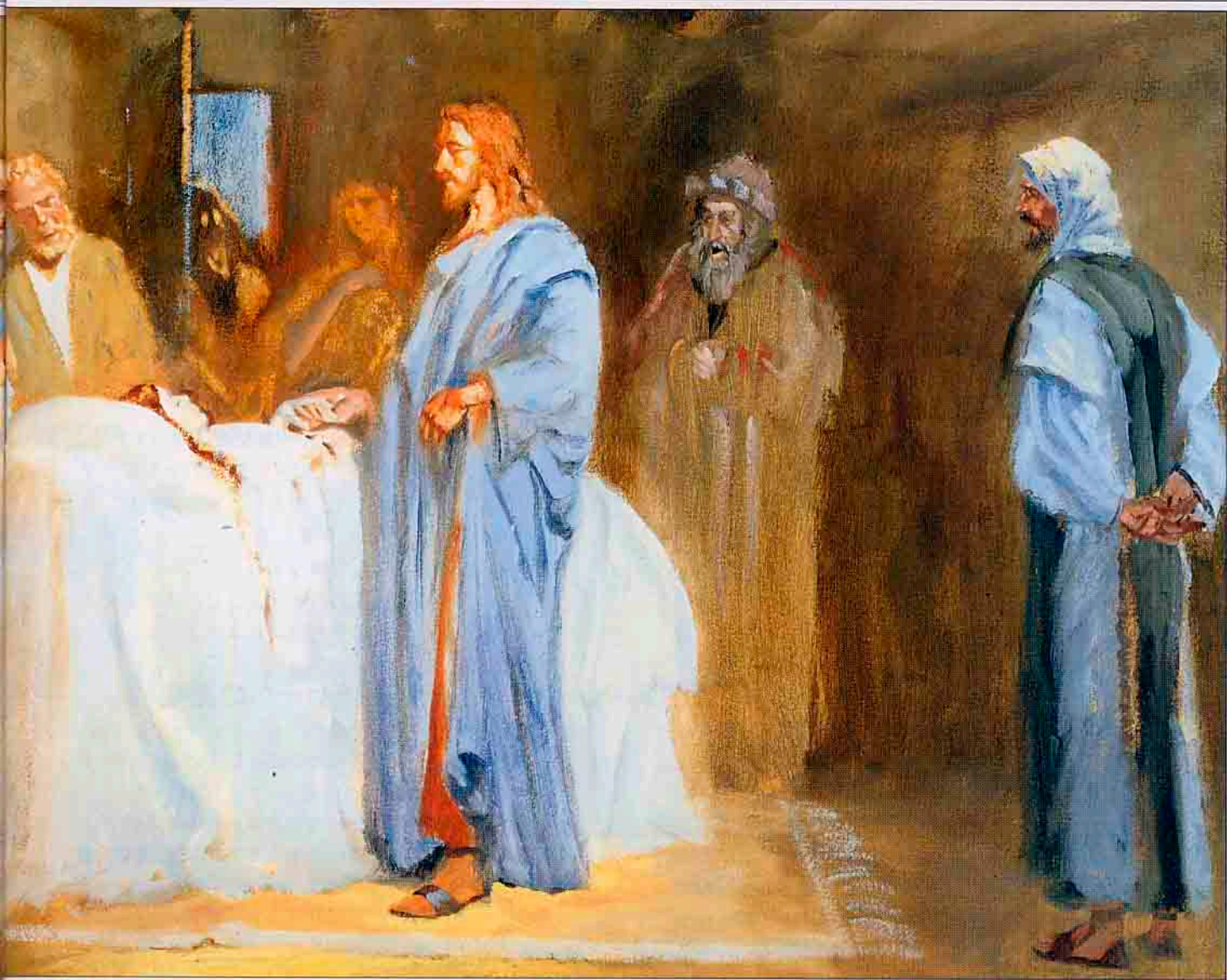
ナザレ人イエスのすばらしい模範、喜びの言葉、人間を超越した働きは、時の流れを超えて私たちにも伝えられています。イエスの模範、み言葉、み業は、悲しみを克服する忍耐力と強さ、死に立ち向かう勇氣、人生に対する自信をもたらししてくれます。混乱や苦しみ、不安の満ちた現代ほど、これらの神聖な導きが必要とされる時代はほかにありません。

主がナザレ、カペナウム、エルサレム、ガリラヤで説かれた教えは、時空の隔てを超え、人間の理解力の限界を超えて、悩み苦しむ人々に光をもたらし、道を示してきました。

老若の違いを問わず、勇敢に死地に赴いた人々、また、自由のために自分の命を捧げた多くの人があります。ある青



イエスはナザレを出て、
ヨルダン川でバプテスマを受け、カペナウム
で死人をよみがえらせた。



年の例を話したいと思います。彼はあわただしい時間の中でペンを取り、母親にあてて手紙を書きました。「ぼくたちは間もなく戦場へ行きます。敵の守りは固く、多くの犠牲者が出ることでしょう。お母さん、できれば生き続けたい。でも、神の目に恥じることのない生活をしているので、死ぬことは恐れていません。」

この貴い手紙はやがて母親のもとへ届けられました。そしてその同じ日にもうひとつの知らせが彼女の家に着きました。それは「御子息の戦死に対し、衷心より弔慰を表します」という、戦死の公報でした。

多くの友人が彼女の家を訪ねて、慰めの言葉をかけました。しかし、彼女の心に安らぎを与えることができたのは、ナザレ人イエスの言葉だけでした。

戦いは遠い異国の地で行なわれるものだけとは限りませ

ん。武器で身を固め、戦火をくぐる人々だけが戦いをしているのではないのです。私はそのような戦いをしている人を、カリフォルニアのある病院で見たことがあります。そこには耳をつんざく銃火もなければ、兵隊も武器の姿もありませんでした。しかし、そこでも生死をかけた戦いが行なわれていました。それは健康で明朗な15歳のポール・バン・ドゥーゼンにとって、人生最初のつらい戦いでした。ポールはあの忌まわしい痛にかかっていたのです。

ポールは人生を愛し、スポーツに秀でていました。彼と両親は、医者^{ひん}の恐れが現実のものとならないよう、大切な右足が切断されることのないよう、祈っていました。しかし、彼らの願いはかなえられませんでした。ポールの命を救うには、どうしても足を切断しなければならなかったのです。

ナザレ人イエスは、善なるすべてのものの源であり、人類に希望を与え、人生の目的を教えられた。

やがて手術が行なわれ、ポールは病室で安静にすることを余儀なくされました。

手術後、ポールの病室を訪ねてみると、彼はほがらかな笑顔を見せ、明るい希望の精神を感じさせてくれました。

真っ白なシーツの上から見えるのは、片足のふくらみだけでした。しかし、ベッドの周りには友人たちから送られた花が飾られ、ポールの命が助かったことを感謝する両親の姿もありました。

ポールに言われて、見舞いの手紙を開いてみると、こう書かれていました。「ポール、私たちはあなたを愛しています。そしてあなたのために祈っています。」それには、日曜学校の同級生たちの名前が連ねられていました。学校の級友たちからも、「すぐによくなるようにお祈りしています。君は本当に立派です」という文面のカードが届いていました。またもう一通、「神の祝福があるように祈っています。明日もう一度来させてもらいます」というホームティーチャーからの手紙もありました。

あのナザレの大工はこのように人々について何と言われたのでしょうか。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

私はその日、人々の祈りの精神をよく感じとることができました。ポールの病室には完全な安らぎが満ちあふれていました。私たちは、遠くカペナウムの地から、「恐れることはない。ただ信じなさい」という言葉がこだまして聞こえてくるかのような感慨にとらわれました。そしてポール自身も「ぼくは大丈夫だよ」と言ってくれたのです。

私たちがそこに見たのは、信仰に満ちあふれ、感謝の思いをたたえた人々の表情でした。その信仰はだれに向けられたものだったのでしょうか。その感謝の念はだれに向けられたものだったのでしょうか。

「ナザレのイエス 救い主、わが王

死に打ち勝ち 勝利もたらす
高きみくらより この世に降る

み業を成し遂げんと 命をささげんと」(賛美歌 86番 [英文, 1948年版])

ナザレからどのようなよいものが出たのでしょうか。

ナザレ人イエスは、模範を示しました。

ナザレ人イエスは、盲人の目に光を与えました。

ナザレ人イエスは、病に苦しむ人々の体に力を与えました。

ナザレ人イエスは、人を生き返らせました。

ナザレ人イエスは、信仰をもたらしました。

ナザレ人イエスは、安らぎをもたらしました。

ナザレ人イエスは、勇気を授けてくれました。

ナザレこそ、キリストを出した地なのです。

ナタナエルはイエスに向かって、「あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」(ヨハネ1:49)と宣言しました。ナザレのイエスが主の主、王の王、貴い救い主、慈愛あふれる贖い主であることを証します。ナザレ人イエス・キリスト、このほかに人を救う名は天下にありません。

皆さんがイエスの模範に従われますように。また主の歩みにならって永遠の生命への道を進まれますように。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. ナザレ人イエスは完全なお方であるにもかかわらず、みずからバプテスマを受けてすべての人に模範を示された。
2. ナザレ人イエスは奇跡を通して、盲人の目に光を、また、病める人に新たな力を与え、一度死んだ人を生き返らせた。
3. ナザレ人イエスは、人生の様々な試練に立ち向かうのに必要な安らぎと勇気を私たちに与えられた。救い主の教えと模範に従う人は、天で豊かな富を授けられる。

話し合いを進めるために

1. 主イエス・キリストから授けられている祝福について、自分の考えを述べる。主が私たちのためにしてくださったことについて、家族にも各自の考えを話してもらう。
2. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのに、よい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、前もって家長と話し合っておく必要はないだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

街角で見つけた一冊の本

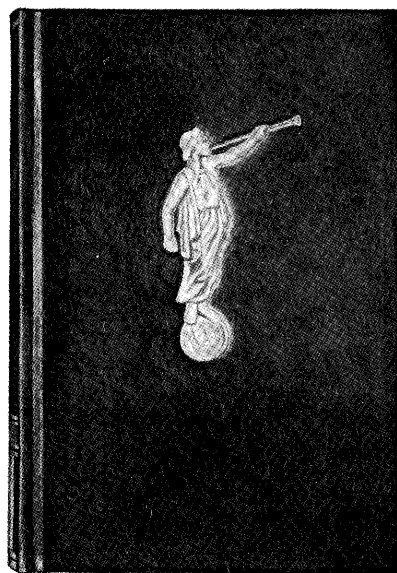
マービン・K・ガードナー

✕ キシコのサカテカスに住むマリル・ラミーレスは、8歳のときに不思議な光景に出くわしました。街角の雑誌販売店で売られている本の中に、青い表紙に金色の天使がラッパを吹いている絵のついた一冊の本を見つけたのです。それは新聞と雑誌の間に紛れて置かれてありました。

どうしてその日に限ってそんな本が売られていたのでしょうか。ラックの中に場違いのように置かれていたその本は、まるで読んでほしいと訴えているかのように見えました。マリルはその本を買って帰りました。

ところが母親にしてみれば、それは娘がそれまで家に持ち帰った数々の見慣れぬ宗教書の一冊にすぎません。「またそんな本を買って読んでいる」と母親はマリルをしっかりとらえました。家中の者も、マリルは変わり者と考えていました。あまりにも自分の世界に閉じ込め、神や宗教的な考えにとりつかれていると思っていたのです。子供が、その家に伝わる先祖代々の宗教に不満を持っていた、その訳を説明できる人はだれもいませんでした。どうしてマリルはわずかな小遣いをつぎ込んでまで宗教関係の本やパンフレットを買い込み、それらを読みふけて時間を無駄にしていたのでしょうか。しかし、家族や友達がどんなにばかにしたり説得しようとしたりしても、彼女の気持ちは変わりませんでした。

マリルは、表紙に金色の天使が描かれているこの本を初めて読みましたが、それは今まで読んだどの本とも違うものでした。なぜか不思議と幸せな気持ちにな



り、最初の1ページを読み終えないうちに涙があふれてきました。さらに読み進むにつれてその気持ちはますます強くなりました。「まるで水が一滴ずつコップに満ちていくようでした。」

この一冊変わった本は、いったいどこで書かれたのでしょうか。「どこか世に知られていない東洋の宗教書か、インドのものかもしれないと思いました。どの教会のものかはわかりませんでしたが、いつか探し当てられるようにと祈りました。ただその本が真実なものであることはわかりました。」

それから9年の間、マリルはすっかりその本に夢中になり、徹底的に研究しました。そして17歳のときのある日、バスの中で白いワイシャツを着たふたりの男性を見かけました。ふたりは数冊の本を抱えていました。もしかして私の本のことを何か知っているのではないかしら。

そう思って、勇気を奮い起こして尋ねようとしたのですが、ふたりはバスを降りて行ってしまいました。

1カ月後、また同じようなふたり連れの青年を見かけたマリルは、今度は機会を逃さずに尋ねました。「おふたりは宣教師ですか。」ふたりの青年はそうだと答えました。

「いろいろな宗派をご存じですか？あまり知られていない宗教を探しているんですけど。」そう言って彼女はモルモン経のことを話しました。

長老たちは目を見合わせ、にっこりと笑いました。「私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です。喜んであなたのご家族にお教えます。」

「いいえ、そうじゃないんです。」彼女は強い調子で言いました。「私はただモルモン経を使用している教会をご存じかどうか、それを知りたいのです。」

冗談を言っているのかと思い、長老たちは首をかしげました。「私たちが何と呼ばれているかご存じですか。」長老のひとりがそう尋ねました。「私たちはモルモンと呼ばれているのですよ。」

そう言って長老たちは自分のモルモン経を見せました。マリルは長老たちの言葉を信じ、ぜひ詳しく話を聞かせてほしいと頼みました。

その夜、長老たちが初めて訪問したとき、マリルはレッスンを何度もさえぎりました。質問があったからではなく、レッスンの内容にぴったりの聖句をモルモン経から引用したのです。マリルはもうすでに聖句を暗唱していました。すりきれてぼろぼろになったモルモン経からも



どうしてその日に限ってそんな本が売られていたのでしょうか。ラックの中に場違いのように置かれていたその本は、まるで読んでほしいと訴えているかのように見えました。

うかがえるマリルの豊富な知識に、長老たちはびっくりしてしまいました。それに、参照聖句をいともたやすく見つけてしまうのです。

翌晩のレッスンのときにも同じことがたびたびありました。長老たちがマリルにバプテスマを受けたいかと尋ねたときにはすぐさま、「はい、明日にも」という答えが返ってきました。マリルは翌日の1984年8月22日、両親の許しを得てバプテスマを受けました。それからマリルは宣教師への道のりを歩み始めました。

「8歳のときモルモン経と出会って以来、私はずっとモルモン経について人々に伝えたいと思っていました。それで宣教師になるべきだと思ったのです」とマリルは言っています。

しかし、マリルはまだ17歳でした。以来、毎年誕生日を迎えるたびに、マリルは監督に自分がもう伝道に召されるのにふさわしい年かどうかを尋ねましたが、そのたびに21歳になるまで待つように言われました。それで21歳になるまでの間、マリルは初等協会と日曜学校で教え、福音の知識を増し加えていきました。

そしてちょうど21歳の誕生日に伝道の召しを受けたのです。

マリル・ラミーレス姉妹はすっかり準備ができていました。優秀な学生であったマリルは、大学を卒業する前から小学校で教え、その収入を大切に貯金していました。伝道の召しを受けたときには、伝道費用が全額用意できていたのです。帰還後に仕事が見つかるという確信はありませんでしたが、マリルはこの時点で仕事を辞めました。

家族はてっきりマリルは気が変になったのだと思いました。宗教書に時間とお金を浪費した子供が、今度は申し分のない仕事を捨て、貯金をはたいて貴重な人生の1年半を無駄に費やそうというので



す。しかし、今回もまた、だれひとりマリルの固い決心を変えることはできませんでした。

伝道に出た今、マリルは家族のために祈り、毎週手紙を書いています。

1988年1月24日。マリルのいる宣教師のグループがメキシコシティー宣教師訓練センターを後に任地に赴こうとしています。マリル・ラミーレス姉妹は集会で証を述べるために立ち上がりました。腰まで届きそうなつやのある黒髪を後ろに束ねてブルーの髪飾りをあしらっています。

説教壇のマイクに届くように低い踏み台の上に立っています。小柄な体つきからは自信なげに話す姿が想像されますが、どうしてその声は力強く、その証は成熟した弟子を思わせず。「私はやっと思いでここまでたどり着きました。」彼女は感きわまった様子で語りました。「そし

て、主がいてくださらなければ自分は無力であることを学びました。でも私は主の限りない愛を感じています。そして自分が信頼してきたお方がどのような方かを知っています。」

翌日、伝道部長会に会ったときにも、マリルは天父の愛について次のような力強い証をしています。「数日前初めて神殿に入ったとき、私は天父のみたまを感じ、そのあふれんばかりの愛に胸がいっぱいになりました。天父に祈り、なぜそんなにこの私を愛してくださるのか尋ねました。すると、このような答えを聞いたような気がしました。『あなたは私が世界中のすべての私の子供たちを愛していることを知らないのか。私はだれひとりとして失われることを望んではいない』と。それで天父が私たち一人一人に寄せておられる偉大な愛がわかるようになりました。」彼女の声は再び感動に震えました。「私は天父と御子イエス・キリストが生きておられ、私たちを愛してくださっていることを知っています。神の娘であること、そして宣教師として主に仕えられることをとても光栄に思います。」

ラミーレス姉妹は現在、メキシコシティー神殿の訪問者センターを訪れる、教会員でない人々に福音を教えています。夜は、同僚と周辺の家々を訪問し、家族に福音を教えています。

8歳のころと少しも変わらず、21歳の宣教師の頭の中は神様のことでいっぱいです。子供のころにモルモン経を読んで一滴一滴聖典の知識を蓄えた彼女のコップは、今やあふれ出るほどになりました。□

「完全な日」のチャレンジ

ブレンダ・ブロクサム・ハント

監督のチャレンジによって私たちの生活が一変したわけではありませんが、完成への道へ一歩近づいたように思います。

「皆さんの中で『完全な日』を過ごしたいと思ってもらえる方はどれくらいいますか。」監督が聴衆に尋ねました。かなりの数の会員が手をあげています。高くあげる人、控え目にあげる人。手をひざにおいたままの人はわずかでした。

「結構でしょう」と言いながらうなずくと、ひとりの教会員にこう尋ねました。「ラリー、あなたも『完全な日』を過ごしてみたいわけですね。じゃあ、壇上まで来てくれませんか。ジョージとルースもどうぞ。ポールもどうぞ。マシューとジョアンも。それにジョンとヘレン、それからベンとキャロルもどうぞ。」

監督は間を取りながら、一人一人の名前をゆっくりと呼んでいきました。かなりの手が下りてしまい、最後まで高くあがっていたのは、ほんのわずかでした。

「『完全な日』を過ごしたいと思っている未亡人の方はおられませんか」と監督は尋ね、聴衆を見回すと、一瞬あたりは静まり返りました。「グレース、あなたはいかがですか。」

名前を呼ばれた人たちが壇上まで来ると、監督は向き直ってこう言いました。「完全な日はいつにしますか。火曜日がいいですか。それとも木曜日がいいですか。」

意表をつかれて苦笑いをする人もいます。実際にそんな決意をするなどとは、だれひとりとして夢にも思っていなかったのです。わかりましたとうなずく人もいました。じっと立ったままの人もいました。しばらくして、だれかが「木曜日はどうでしょうか。それなら準備の時間もまだ少しありますから」と言いました。

監督はほほえみながら答えました。「よろしいでしょう。では、木曜日を『完全な日』として過ごしていただくことにします。次の日曜日の聖餐会にだれがお話をするのか、まだ決めてありませんから、皆さんに『完全な日』をどの

ように過ごしたか、お話ししていただきましょう。」

監督は聴衆の方を振り返って言いました。「ほかにも『完全な日』を過ごしたいと思っている人はいませんか。」教師定員会の会員であるジェームスが、いかにもうれしそうに手をあげました。こうしてジェームスも仲間に加わりました。

それから監督は聴衆に向かってこう言いました。「ワード部の会員としての皆さんの責任は、これらの方々がそれぞれの割り当てを果たすことができるよう、お祈りしていただくことです。」

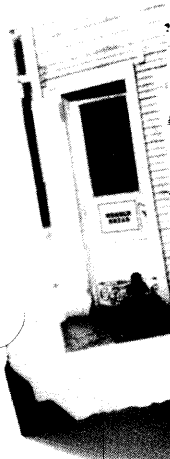
どうしたら完全な日を過ごすことができるか

「どのように生活したら完全な日を過ごすことができるだろうか。」監督のチャレンジを受け入れた人々の頭の中には、この疑問が渦巻いていました。この一週間は、ワード部の会員が会うたびに、「完全な日」のチャレンジの話題で持ちきりでした。皆その報告を心待ちにしていました。

ついに日曜日がやって来ました。

最初に茶色い短い髪をした未亡人のグレースが、^{ひとみ}瞳を輝かせながら話をしました。その日は予定していたとおりに事が運んだわけではありませんでした。朝起きてみると、ひどい鼻風邪にかかっていたのです。3年ぶりの病気でした。そこでその日の計画を変えて、母親の生涯についてまとめたノートを作ることにしました。いつかはやらなければと長い間思っていたことでした。そこでグレースは妹にも手伝ってくれるよう頼みました。ほぼ一日がかりでしたが、ふたりで一緒に写真を張ったり文章を書いたりして、念願の母親の生涯の物語を作ることができました。

グレースはその日の活動を通じて、何か新しい道が開けてきたような思いがしています。彼女は祝福師の祝福の中で、いずれ家族の歴史のために働きをなす、と言われていました。「私は家族の歴史がどのようなものなのかわかりませんでしたので、あまり関心を持つこともありませんでし





た。しかし、母親の記録を作り終えたとき、亡くなった主人の記録も作ろうと決意しました」とグレースは話しています。

それ以来、グレースは夫と息子、娘の古い記録を整理しました。「これまで何年間もためてきた貴重品や記念品の詰まった箱を全部整理すると、多くの先祖のために神殿の儀式を行なうに必要な資料が見つかりました。私の仕事は今始まったばかりですが、喜んでやりたいと思っています。」

ジェームスがその日に立てた目標は、グレースとはかなり違ったものでした。両親に従順になるという目標を立て、頼まれたことは何でもすぐに、しかも喜んでしようと思いました。「母が仕事を頼むのは、決まって友達が遊びに来ているときや、本を読んでいて一番おもしろい所にさしかかったときのように思えます。だからときどきはと我に返って、『すぐにやるんだ』と自分に言い聞かせなければなりませんでした。でもその日の終わりには、母から頼まれたらすぐにやれるようになり、とてもさわやかな気持ちでした。」こうしてジェームスは話を終えました。

ほぼ一日がかりでしたが、ふたりで一緒に写真を張ったり文章を書いたりして、念願の母親の生涯の物語を作ることができました。

一日の始めに調子を整える

ユーモアのセンスあふれた15歳のポールも、監督から与えられた課題にまじめに取り組みました。まだ毎日聖典を読む習慣がついていなかったのも、ポールはその日は聖典を読むことから始めようと決意しました。ポールは次のように言っています。「理由は自分でもよくわからないのですが、その日に聖典を勉強するのは、とても大切なことでした。水曜日の夜中には何度も目を覚まし、寝過ごしてないことを確認しました。ついに目覚まし時計が鳴り、モルモン経を手に取りました。」

ポールは約45分間聖典を読みました。「聖典を読むと、その日一日の調子を整えることができたような気がします。学校の友達や先生、家族とうまくやっていくのは、いつもたやすいこととは限りません。ぼくの『完全な日』も例外ではありませんでした。多少の失敗もしましたが、いつもよりはずっとよい生活ができました。」

ポールはさらにこうつけ加えています。「おかげで自分に与えられている祝福や、自分のしなければならないこと、自分の過ちについて今まで以上によくわかるようになりました。その日は、よりよい自分になるにはどうしたらいいのだろう、と考えることがよくありました。」

「よりよい自分になるにはどうしたらいいのだろう。」それは、監督のチャレンジを受け入れた人が共通して抱いた疑問でした。そして多くの人が他人に奉仕をするうちにその答えを見つけたのです。

ジョージにとっても、「完全な日」を過ごすことは、非常に大きな課題となりました。「思い描いたとおりの一日を過ごすことができたわけではありませんが、自分の生活には大きな影響がありました。これまで、『完全な日』を過ごしてみようなどということは、考えたこともなかったのですから。」

ジョージの妻のルースは、「完全な日」を過ごした結果、以前に比べて夫との関係がよくなってきたことに気づきました。ルースはこう語っています。「完全な一日を過ごすように努力することによって、私は自分の癖に気づきました。たとえば、ごくさ

さいなつまらないことで、突然夫に腹を立てるようなことがよくありました。今はそのような癖を直そうと努力しています。」

自分の欠点に気づき、それを克服するための方法を講じるといふ監督のチャレンジを受け入れた人々は、たいてい皆このようなことを体験しました。ラリーはこう言っています。「多くの帰還宣教師と同様、私も聖典の勉強をなおざりにするようになっていました。いつも、ほかにすることがたくさんあるように思えたからです。ですから、監督からこの課題を与えられたとき、伝道中に感じたように、もう一度主を身近に感ずるようにならなければと考えました。」

しかし、実際には計画どおりにいきませんでした。ひどい歯痛のために、「完全な日」が台無しになってしまったのです。「それでも、自分の一日が失敗だったとは思いません。そのときの状況がどうであろうとも、完全な一日を過ごすように一生懸命努力したからです。」

ジョンの話を聞いてみましょう。「妻のヘレンのおかげで、私にとっては毎日が完全な日です。生涯をヘレンと共に過ごすことは、最大の祝福です。私にとって、『完全な日』というのはヘレンと共に過ごすことです。私たちはお互いにかけがえない親友であり、一緒に過ごす



のはとても楽しいことです。

私たちはふたりそろって祈りと聖典の勉強で一日を始めます。仕事は別々ですが、心は一日中一緒です。お弁当箱の中に愛の言葉を書いたメモを入れておいて、互いにびっくりさせ合ったりすることもよくあります。

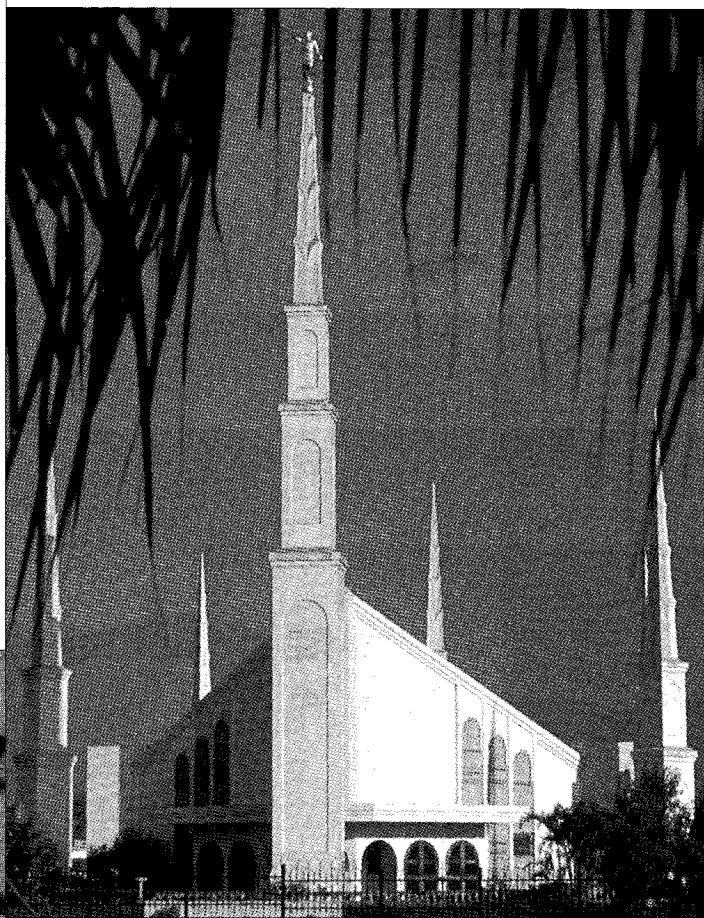
仕事を終えて帰宅すると、一緒に夕食をとり、一緒に後片づけをします。それからその日一日の出来事について話し合い、翌日の計画を立てます。特別な活動としては、毎週、神殿に参入しています。先週は、『完全な日』に神殿へ行き、身代わりの結び固めの儀式を受けました。聖壇に並んでひざまずき、手を取り合って、自分たちの結婚の誓約を改めて考え直すことができました。すばらしい経験でした。」

主の宮居で奉仕する

ベンとキャロルにとって、「完全な日」の主要な仕事は神殿奉仕でした。ベンは数年前に退職し、キャロルと一緒に召しを受けて、神殿で働くことになりました。「私たちは毎週2日ずつ神殿で奉仕をしています。監督の提案した『完全な日』は、たまたまそのうちの一日に当たりました。

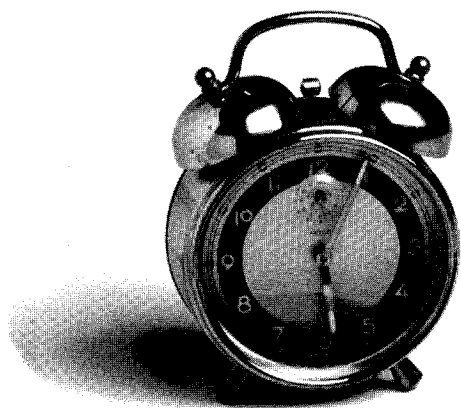
私は神殿では主任として働いていますが、その日の祈り会で、ある兄弟が私のために祈りを捧げてくれたのです。

その祈りは、主任の私を見守ってくださるよう、そして私に祝福が与えられてその日が特別な日になるようにというものでした。私はとても感動しました。その兄弟は、『完全な日』については何も知りませんでしたが、その祈りは私にとって本当に意義深いものでした。



「完全な日」を過ごすというチャレンジは、信仰を強めるのに役立つだけでなく、思いがけなく楽しいひとときをもたらすこともあります。ある若い母親の「完全な日」は、こんな一日でした。パンケーキを作ろうとミキサーをかけたところ、バターがあたり一面に飛び散り、そばで見ていた息子の顔もベタベタになってしまいました。「ほかの日だったらきっとイライラしたことでしょうね。子供と一緒に笑い、楽しい一日でした。」





早朝に聖典を読むと、
一日の調子が整えられ
るようでした。



『完全な日』を過ごすうえで、これ以上に恵まれた場所があるでしょうか。主の宮居の中で主のみ業を行ない、素晴らしい兄弟姉妹たちと一緒に、日の光栄の王国へと歩もうとしている人々のお手伝いができるのです。」

マシューは、「完全な日」について家族で次のように話合ったと語りました。「私たちはまず第一に毎日少しずつ自分自身を完全な者にしていく必要があるということがわかりました。ここ数カ月、妻のジョアンがかなり重い病気にかかっていて、そのために家族全員がいろいろなことを感じるようになりました。そして、今まで以上に主に頼り、毎日主の導きを求めるようになりました。また神権の祝福の力について一層の認識と理解を深めるようになりました。『完全な日』を過ごすためには、これまでどおり互いに励まし合い、今受けている祝福にふさわしい生活をしようということによって一致したのです。」

「完全な日」の割り当てを受け入れた人々の話をひととおり聞いたあとで、私は監督に、なぜこのようなチャレンジを与えたのか、その理由を尋ねてみました。

監督はこうに話してくれました。「私は『完全な日』を過ごすということについてずっと考えてきました。ふだんは、外部から様々な影響や圧力を受けて、霊的なことや

何を理想とすべきかという点に注意を向けることがほとんどできません。そのため、『完全な日』を過ごしたり、完全な生涯を送ったりすることはできないということがよくあります。しかし、今こそワード部の会員たちがやってみる時だ、という強い気持ちを感じたのです。

これで、どんな状況にあっても、今よりは少しでも完全な生活ができるということがわかったのではないのでしょうか。この割り当てを行なうに当たって、お金を使う必要のあった人はひとりもいませんでした。けれども、時間を使い、自分自身を捧げなければならなかったのです。

このチャレンジに一生懸命にこたえてくださった方々だけでなく、ワード部の多くの会員も、『完全な日』を過ごそうと努力してくださいました。それで、私たちは自分を完全な者にするというチャレンジにもっと心に向けるようになり、主のみたまを受けるのにふさわしい生活を送ろうと、今まで以上に努力するようになったのです。」

監督の「完全な日」のチャレンジによって私たちの生活が一変したわけではありませんが、完成への道へ一歩近づいたように思います。完全な者になることは、私たちだけが達成したいと望んでいる目標なのです。□

*ブレンダ・ブロクサム・ハント：主婦。ソルトレーク・ウェルズステーキ部ベルビディアワード部所属。

母親としての務め

中央扶助協会会長

バーバラ・W・ウインター

主は末日聖徒の女性に、私たちに託された子供たちの人生を形作るという特権を与えてくださいました。すなわち、子供を養い育て、子供に仕える特権です。

1988年4月に開かれた総大会の神権部会の説教で、十二使徒評議員会のジェームズ・E・ファウスト長老は、女性のことを「人類を豊かに祝福してくれる存在」と言われました。また「女性が生まれながらにして身につけている資質」を賞賛し、「母親としての務め」を果たすときに必ず天使の助けがあると約束されました。というのも予言者ジョセフが言っているように、その務めは「女性の天性によるもの」だからです。

私たちは「天性に従って」行動している末日聖徒の女性として、母親という務めが神聖なものであることをよく知っています。時折、ほかの務めを果たさなくてはならない場合があっても、女性には子供を養い育てるという生来持って生まれた務めがあることを忘れてはなりません。善き伴侶のいる女性も、ひとりで子供を育てている女性も、また、ほかの女性の子供たちを教養育てている独身や未婚の女性も、皆この務めを果たすことができます。

母親の子供に対する思い、子供の母親に対する思いは、どの文化においても変わることがありません。それは、少しも意外なことではなく、むしろとても感動的です。富んでいようと貧しかろうと、教育の機会に恵まれていようとまいと、生活環境に関係なく思いは皆同じです。母親というのはほとんど例外なく子供の幸福のためには何でもします。子供のために払う犠牲は大きすぎることはないのです。

いろいろな所で出会った模範的な母親や子育ての例がいくつも私の心に浮かんできます。ペルーのリマを訪問したとき、ある母親が、4人の息子とふたりの娘の写真を私に見せてくれました。そして、とても誇らしげに子供たちの業績を話してくれました。高等教育を受ける機会が限られていたにもかかわらず、子供たちは母親の努力と決意によって皆大学に進んだのです。母親は物質的なものより高い目標を目指し、みずからを惜しまず捧げるように、また教

会においても社会においても貢献者となるよう子供たちを教育したのです。ペルーでは今、教会への改宗者が急速に増えており、彼女の子供たちは現在教会の指導者として大きな働きをしています。

フィリピンの、人里離れた小さな支部を訪ねたこともあります。会員たちは柱に屋根をかぶせただけの小屋で集会を開いていました。ひとりの年輩の女性は自分がその小さな教室に集まっているほとんどの子供たちの母親であり祖母であることを話してくれました。机に置き、壁に立て掛けた黒板には、レッスンの大切なポイントがきれいに書かれていました。子供たちやほかの人々のために自分にできる最大のことは教えることであると、あとでその女性は私に話してくれました。そして何度もこう言ったのです。「私は家族を愛しています。ですから彼らに教えているのです。」この母親のように子供たちを教えていくには、絶えず子供たちの必要に心を配っていなければなりません。一緒に学びながら子供たちを励ましていかなければならないのです。

日本の広島を訪れたときのことです。間もなく執事になるという11歳の男の子に会いました。その子はステーク部大会で話をするようになりました。少し緊張しながらも、聖句をスラスラと引用し力強い説教をしたのです。会衆の中に、いきいきとした笑顔の女性がいましたが、それが母親であることは間違いありませんでした。

最近私は、長年敬愛するある母親を訪ねました。その姉妹は大家族を抱えており、私はその家の子供たちの成長をこれまでずっと見守ってきたのです。教育、伝道、神殿結婚、子供たちはこれらをみなきちんと計画して達成しました。このような成功を取めた秘訣は何かと、私は彼女に尋ねてみました。その姉妹は謙遜にも、まだ完全に成功したわけではなく、むしろ人生は試練と苦難の連続であったと

子供を育てたいと願う女性が、 無私の献身的な奉仕によって 人々に祝福をもたらすときに 奇跡が起こるのです。

語りました。しかし、その後で、彼女は家族がいつも親密な関係にあり、きずなを強めてきたことがとても大切であったと話してくれました。

彼女はこう言っています。「子供たち一人一人の人格を尊重しなければならないと考えてきました。それぞれの才能や能力は違っても、子供たちは皆神の子供であり、神に愛されているということを知る必要があります。我が家では子供たちが結婚した後も、定期的に家族で集いを開いています。教会が聖徒たちを啓発し、指示を与えるために総大会を開くように、我が家にも同じ目的で家族の集いが必要です。このような集いは確かに家族の愛を強めるのに役立ちます。」

アメリカ国内のマザー・オブ・ザ・イヤ（最優秀母親賞）およびヤング・マザー・オブ・ザ・イヤの受賞候補にあがった10人の末日聖徒の女性も、同様の献身的な気持ちを表明しています。これらの姉妹たちは皆子供の人格を形成するには無条件の愛と労働が大切であると語っています。また、笑ったり歌ったりすること、肌と肌の触れ合いやほめること、自尊心を高めることも大切だと述べています。母親は子供と一緒に信仰をはぐくみ、学び、ときには助言します。また発見の喜びを分かち合い、共に成長し、力を合わせて夢を実現するのです。

末日聖徒の女性に特別な賞が授与されることは驚くべきことではありません。第一副管長のゴードン・B・シンクレー長老は次のように言っています。「教会はシオンの娘に対する訓練と責任の付与という点においては、これまでもかなり積極的に取り組んできました。教会では……一貫して、この世で女性に与えられた最も偉大な使命は、誉れある幸福な結婚をし、家族を立派に、そして幸福に育てることにあると教えられ、信じられてきました。それは実際の生活の中で心身を打ち込み、母親としての務め、養育の務

めを果たすという責任で……す。しかしほかの様々な働きと相いれない性格のものではありません。女性には地域社会においても教会においても、妻または母親としての務め、善良で立派な子供を育てる務めなど何の矛盾もなく、調和したすばらしい責任が数々あるのです。」（『若い女性に対する私たちの責任』「聖徒の道」1989年2月号、p.115）

この世で子供に恵まれない女性たちの中には、ほかの家族の子供たちを教え導く教師として、子供の人格に大きな影響を及ぼしている人がたくさんいます。私に初めて断食と祈りについてのレッスンをしてくれたのは、ある学校の校長先生をしている女性でした。その女性のおかげで、私は祈りや断食を実生活に取り入れることができるようになったのです。子供を育てたいと願う女性が、無私の献身的な奉仕によって人々に祝福をもたらすときに奇跡が起こるのです。

女性のいろいろな才能や特徴を知るにつけ、私は女性がこの神権時代にあって、大きな役割を果たすように求められていると感ぜずにはられません。私たちは神の娘として、お互いにまた家族や友人に対して思いやりを示すべきであることを忘れてはなりません。私たち女性のやさしい手は、だれもが経験する人生の苦難を和らげるためにあるのです。

神から授かった務めを果たすために、私たちには貴重な機会が与えられています。神は、私たちに託された子供たちの人生を形作るという特権をくださっているのです。自分の子供に恵まれない人でも、教師や保母としての力を発揮することができます。どんな所に住んでいるか、富んでいるか貧しいか、また子供が多いか少ないかなどは一切関係がありません。だれもが「母親としての務め」を果たし、キリストのような愛を共に味わうことができるのです。□

* 以上は、「チャーチニュース」の記事からとったものです。



聖徒と共に涙を流す

管理監督会第二副監督

グレン・L・ベイス

数年前、「聖徒と共に涙を流すよりは罪人と一緒に笑いたい」という歌詞の流行歌を耳にしたことがあります。最初この歌詞を聞いたときは腹立たしく思ったのですが、翌日もう一度聞いたときは、腹立たしく思えた理由がわかり、自分がおかしくなりました。確かに、一見真実味があるからです。

小学生のころ、日曜日によその子供たちは映画を見に行くのに、私は両親と教会へ行きました。中学生のときは、ほかの人たちが昼ごろまで眠っているのに、私は断食献金を集めて回りました。高校時代は、日曜日にスーパーマーケットで働けば平日の2倍の収入が得られたのに、安息日を聖く守りました。伝道中には、土曜日の夜街頭を同僚と共に歩きました。同年代の若者たちがデートの相手と共に笑いながら私たちを指差し、「あの人たち何なの？」などと言いながらそばを車で通り過ぎていったものです。

結婚して間もないころ、私たちは、幼い子供たちを連れて教会へ行きました。スーパーボール（アメリカン・フットボールのプロリーグの選手権試合）が行なわれる日曜日には、世間の人々が飲み食いし、にぎやかに声援を送っている一方で、私たちは子供たちをなだめすかして、ステーク部高等評議員の話聴かせようと一生懸命でした。またあるときは、我が家のポンコツ車が高級車と並んで信号待ちをすることがありました。すると、最新流行の服を着たいいわゆる「標準的な」人数の子供を乗せた人たちから、ディスカウントストア（中古品を取り扱う店）で買った古着を着た我が家の6人の子供たちはさげすみの目で見られたものです。

私は去年とても無念な思いをしました。大学生の子供たちに説得されてブリガム・ヤング大学で開かれたコンサートに行った時のことでした。冒頭で紹介した歌詞のついた歌を発表した歌手がこう言いました。「私は人を改宗させようとは思いません。ただ別の道もあるということを人々に伝えたいのです。」私はステージに駆け上がってマイ

クをひったくり、自分の意見をぶつけたい気持ちにかられました。けれども、そんなことをすれば当然子供たちの反感を買うことになるのでじっと我慢していました。

「罪人は笑い、聖徒は涙を流す」というのも、ひとつの人生観といえましょう。しかし、あまりにも単純で、現実（^{ざっしつ}）にそぐわないと思います。罪人の中にも人生に挫折して涙に暮れている人もいれば、私たち末日聖徒にも確かに笑いはあるからです。もちろん、罪人にとっても聖徒にとっても、人生において意義あるものすべてがおもしろいとは限りません。ときには、教会の標準に従って生活する努力を何らしていない人の方が、標準を守っている人々よりも生活を楽しんでいるように思えることがないでしょうか。

私たち末日聖徒の生活は、戒めや期待、奉仕、犠牲、金銭上の義務などで縛られているように見えます。世の中にはこうしたいわゆる束縛が何もない人々もいます。月曜日の夜に限らずもっと家にいて家族と過ごす人々もいますし、収入以上のお金を使う人々もいます。私たち末日聖徒は教会に納めるべきお金を納めてしまうと、間違ったことをする余裕などはなくなってしまいます。

自分の気持ちに素直になるならば、確かに聖徒たちにとって泣きたくなくなるようなことはたくさんあります。しかし、得る価値のあるものはそう簡単に得られません。私たちが求める日の光栄の幸福は努力せずには得られないのです。

試練のただ中であって

私たちは試練のただ中にあるときに、「こんな目に遭うような悪いことは何もしてはいないのに」と叫ぶことがあります。苦難というものは、何か悪いことをしているからではなく、逆に正しいことをしているために訪れることがよくあります。昇栄に至るためには、自分を清め、神から聖別されるように努めなくてはなりません。私たちの霊が主のみこころに従順になるように、ある程度の試練や苦難を



私たちは試練のただ中にあるときに、「こんな目に遭うような悪いことは何もしてはいないのに」と叫ぶことがあります。苦難というものは、何か悪いことをしているからではなく、逆に正しいことをしているために訪れることがよくあります。

くぐり抜けなければならないのです。

ジョセフ・スミスの人生は、まさしくこの原則を実証するものと言えましょう。ジョセフ・スミスは1838年から1839年にかけての冬にリバティーの獄に捕らわれていました。外面的な状況から判断する限り、おそらくこの時期ほど彼の人生において暗い時期はなかったでしょう。聖徒たちは迫害や略奪に遭い、殺害され、また、お互いの間にも争いや背教が見られました。

私たちはジョセフ・スミスが受けた苦難を完全には理解できないと思います。獄の寒さについてではなく、ジョセフ・スミスがどれほど落胆していたかということについてです。ジョセフ・スミスは御父と救い主にまみえ、モロナイをはじめバプテスマのヨハネ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネなど多くの天使の訪れを受けました。そのような経験によって、苦しみがいくらか和らげられたのではないかと、皆さんは考えることでしょう。

ところが実際は、そのような経験があったためになおさら苦しみが増したのではないのでしょうか。とりもなおさず、ジョセフは神が自分を救い出すこともできると言うことをよく知っていました。ジョセフが「お、神よ、^{なんじ} 汝は何所に在したもうや。神の隠家を蔽える大幕何所にありや」(教義と聖約121:1)と主に叫んだのは、このような背景があったことだったのです。

この苦悶の叫びに対して主はこのようにお答えになりました。「わが子よ、汝心安かれ。汝の不幸汝の困苦はただこれ束の間なり。」(教義と聖約121:7)そしてこうつけ加えておられます。「わが子よ汝この事を知れ、すなわちこれ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのものなり、と。」(教義と聖約122:7)

「汝に善からんため」とはどういう意味でしょうか。そのような経験がどうしてためになるのでしょうか。かつて教会幹部の職にあったB・H・ロバーツ長老は、1842年にジョセフが同じような経験をしたときどう対処したかを説明し、その点についてひとつの示唆を与えています。

「人生の試練は、それが人の心をかたくなにするものでない限り必ずためになる。試練のさなかにあった日々、予言者はいっそう心やさしく、すべての人に対して思いやり

深くなったように思われるし、霊的に最も高められたのは間違いない。これを読んで、神の靈感により、ジョセフの理解力が一層深まったことを疑問に思う者はいないはずである。」(ジョセフ・スミス「教会歴史」全7巻、5:28)

主はジョセフに「これ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのものなり」と言われた後、さらにこう言われました。「『人の子』は一切これらのものの下に身を落したり。汝は彼より大いなるか。」(教義と聖約122:8)

救い主がゲツセマネで苦しみを受けられたのは、ひとつには試練や苦難を経験する私たちに対して救い主が限りない思いやりを覚えるようになるためでした。ゲツセマネでの苦悩を通して、救い主は完全な判士たる資格を得られたのです。最後の審判の日に救い主のもとへ行行って、「あなたに私の苦しみがおわかりになるはずはありません」と言うことはだれひとりできません。私たちの受ける試練がどういふものか、救い主は私たち以上によくご存じなのです。なぜなら救い主は「一切これらのものの下に身を落」とされたからです。

愛する御子がゲツセマネの園で苦悩しておられる姿を、慈悲深い天父は見ておられました。救い主は叫んでこう言われました。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい。」(マタイ26:39)

御子の嘆願を拒絶せざるを得なかったときの御父の目に浮かんだ涙を想像することができのでしょうか。また十字架上の救い主を見捨て、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15:34)という御子の叫びを耳にした御父は涙を流されました。そのときの御父の気持ちがどのようなものであったかを理解できるのでしょうか。ところが父なる神と御子イエス・キリストが涙を流されているにもかかわらず、罪人たちは笑ったのです。

私たち自身のゲツセマネ

私たちはそれぞれ自分自身のゲツセマネを経験しなければなりません。聖徒にとっても罪人にとっても、おそらく

あなたが大きな苦難に遭って涙を流している
ときに、ほかの人が罪人と一緒に笑ってい
ても、自分がかぐり抜けるべき精練の火をのろ
ってはいけません。試練も神から与えられた
ものであり、最終的にはあなたが完全になる
ために役立つのです。





R. T. BARRETT

わが子の死ほど大きな苦難はないでしょう。私の知り合いのある父親は、10歳になる娘を事故で失いました。父親はその知らせを聞いてからすぐに、娘へあてた手紙を書きました。その手紙を読むと、この善良な父親が、福音の知識と慰め主からの賜のおかげで、この苦難を通してみずからを聖める経験をしたことがわかります。もし福音の光がなかったら、まったく違った思いを抱いたことでしょう。(本人の許可を得て、その手紙を引用させていただきます)

「もしよかったら、聞いてください。パパとママはうれしかったとき、悲しかったときにこのようなことを考えていたのです。

お前は我が家の光の天使でした。この世を離れるときでさえ、お前はこの別れが一時の別れであって、決して暗い悲しみでないことを教え、私たちの心を清めてくれました。家から遠く離れたこのホテルの部屋で、たった今お前の死を聞いても、パパはお前が本当は家にいると信じています。もう今までのように不自由な体で苦しむこともなくてよかったね。お前は不平ひとつこぼすことなく生きた。本当に立派でした。

ママもパパも7人の子供たちも皆、お前がいてくれたおかげで随分成長しました。お前は生まれてすぐ特別な治療を受けなくてはなりませんでしたが。そこで私たちはいろいろなことを学びました。不安や未知のものを受け入れることや、心身の問題を抱えた人々をもっとよく愛すること、天父に願い求めることなどです。天父のことは、今は私たちよりもお前の方がもっとよく知っているね。お前は大きくなるにつれて、意志の強さを教えてくれました。ミルクをこぼしたってむしろ当然だったのに、一度もそんなことはしなかったね。丸1年の間、つづり方ではいつもほとんど満点だったし、算数にもねばり強く取り組みました。本だって、ママと一緒に、文句ひとつ言わず毎晩読んでいましたね。そうです、私たちはできる限りのことをしてお前の勉強を助けたいと思ったのです。でも、私たちがお前から教わったことは、本に書いてあるようなことではありません。筆で記すことは到底できないほど神聖なことばかりです。

家族みんなのために祈っています。主はもうしばらく私たちがこの世にとどまることを望んでおられるのです。また、ふさわしい者となってお前と再会し、完全な身体となったお前の姿を見られるように祈っています。ああ、どんなにかお前ともっと一緒にいたかったことか。『パパ大好きよ』と言ってくれたあの声を聞けたらどんなにいいだろうか。またお前を強くこの胸に抱きしめることができたならどんなにうれしいだろうか。そう、きょうは特にね。」

精練の火

あなたが大きな苦難に遭って涙を流しているときに、ほかの人が罪人と一緒に笑っていても、自分がかぐり抜けるべき精練の火をのろってはいけません。試練も神から与えられたものであり、最終的にはあなたが完全になるために役立つのです。私たち末日聖徒もあえて楽しくないことを求めるわけではありませんし、苦しみや苦勞を望んでもいません。けれども、試練や苦難はだれにもあり、それらを通して心を清め、昇栄に向かって成長できることを認識しています。

ここまで悲しみや苦しみ涙について述べてきました。次に違った種類の涙についてお話しします。この種の涙は聖徒だけのもので、罪人には縁のないものです。

私が長老定員会の会長会の職にあったときです。私たちはいくつかのあまり活発でない家族に働きかけていました。ある夫婦との個別面接で、私はもうそろそろ家族で神殿に行かれてはいかがでしょうかと尋ねました。

とても信じられなかったのですが、はい、という答えが返ってきました。

私たちは泣きました。

その家族は、ステーキ部大会の土曜の夜の集会で自分たちの「改宗」について語りました。愛の込められた話を聞いて、私は涙を流しました。その家族と一緒に神殿へ行くときまでには、涙がかれてしまったと思うくらいです。彼ら夫婦と美しいお嬢さんたちが聖壇にひざまずいて、今も永遠にわたっても結び固められる姿を目にしたとたん、また涙があふれてきてしまいました。

管理監督会に召されて間もなく、叔父から手紙が来ました。このような文面でした。「親愛なるグレン。先週の日曜日、テレビで君の姿を見ました。罪人のこの私が総大会を見てどんな成果があったかわかるでしょうか。」

その夏、叔父夫婦は金婚式を祝いました。お祝いが済んでから、私は叔父夫婦を車のところまで送りながらこう言いました。「もしソルトレーク神殿で私に会いたかったら、喜んでおふたりの結び固めをさせてもらいますよ。」

それから1年が過ぎました。ある夜遅く帰宅すると、こんな伝言が置いてありました。「電話をください。何時になっても構いませんから。叔父より。」

電話をかけると叔父はこう言いました。「グレン、金婚式のときに君が申し出てくれたソルトレーク神殿での結び固めの話なのだが、受けようと思ってね。」

「本気なんですか？ それでいつ？」

「12月をお願いするよ。それまでには私もふさわしくな

れると監督は考えているみたいだね。」

私はまず叔父夫婦を結び固め、それからふたりの息子を叔父夫婦と結び固めました。結婚して51年たって、ようやく叔父夫婦は神殿のすばらしい祝福にあずかったのです。家族みんなが涙を流していました。

大管長の涙

エズラ・タフト・ベンソン大管長は、しばらく健康を損ねておられましたが、ある日月例の神殿での集会で再び教会幹部の前に立たれました。ベンソン大管長と一緒に集ったのは、2カ月ぶりのことでした。大管長は私たちに愛を伝えてからこう言われました。「兄弟の皆さん、こうしてまた皆さんと同席できて大変うれしく思います。」そして涙を流されました。

救い主はニーファイの民への訪問を終えようとするに当たって、民の愛と信仰に深く心を打たれました。救い主はご自分がもう行かなければならないと告げただけでしたが、群衆をご覧になると、「群衆は涙を流してイエスに今しばらく自分らと共に居りたまえと言わんばかりにイエスをじっと眺めていた。

そこでイエスはかれらに向ってまた『見よ、わが胸は汝らに対する憐みにて溢るるばかりなり』と言われました。(III ニーファイ17:5-6)

そしてイエスは病める者を癒され、病を癒された者は「イエスの足もとに伏してイエスを拝んだ。そして……涙でイエスの足をぬらした。

それからイエスは、人々にその小さい子たちを連れて来よと仰せになった。

そこで人々はその小さい子たちを連れて来てイエスを取りまいて地上にすわらせた。……

ここに於てイエスは『汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ、今わが喜びは満ち溢れたり』とかれらに言って、涙を流したもうた。……イエスはそれからかれらの小さい子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈りたもうた。

そしてこれをしてしまうとまた涙を流したもうた。」(III ニーファイ17:10-12, 20-22)

ブルース・R・マッコンキー長老は、亡くなられる数週間前の総大会で、この涙について述べています。それは、今までに聞いたことのない力強い証でした。みずからの死への旅立ちが近いことをよく知っていたこの特別な証し人は次のように語っています。「イエス・キリストに関して、イエスが生ける神の御子であり、この世の罪のために十字

架におかかりになったお方であることを証します。イエスは私たちの主であり、神であり、王であられます。これは人から教えられたのではなく、私自身が自分の体験を通して得た知識です。

私は主の証し人のひとりであり、いつの日か主の手と足の釘跡に触れ、主の足を涙でぬらすことでしょう。」(『ゲツセマネの清めの力』『聖徒の道』1985年7月号, p.11)

このすばらしい説教をその場で聞くことのできた私たちは、マッコンキー長老が説教壇に立ってそのような涙を流されたと証することができます。あの涙は決して悲しみの涙ではなく、大きな祝福が待ち受けていると感じた喜びの涙だったのです。

マッコンキー長老がお話をされるちょうど前日に、私は管理監督会への召しを受けました。マッコンキー長老がお話しになった翌日、復活祭の日曜日の朝5時に、その日の午後に話す説教の原稿を書いていました。マッコンキー長老の力強い説教を思うと、自分の弱さや無力さを痛感して気が滅入りそうでした。けれども、今までの自分の人生で起きたことをいろいろと思い巡らしているうちに、自己不信は消え、心の平安が戻ってきました。そして、自信と永遠の喜びがわきあがり、涙があふれてきました。

そのとき話した事柄の中から、もう一度お話しするのがよいと思われる箇所を書き留めてみました。「私は主イエス・キリストを愛しています。また、主の贖いにより私の心が変わられていくことを快く思っています。……以前、私は闇の中にいました。しかし今は光を見えています。また、一度は確信を失いました。しかし今は、主は何でもおできになることを知っています。そして、以前は恥入っていましたが、今は『肉体が燃えんばかりに、〔主の〕愛』(II ニーファイ4:21)に満たされ、『その慈愛の御腕に抱かれ』(II ニーファイ1:15)ています。」(『主を信頼する』『聖徒の道』1985年7月号, p.80)

私は今もあの復活祭の日曜日と同じ気持ちです。主の愛を知った喜びの涙がほおをつたいます。

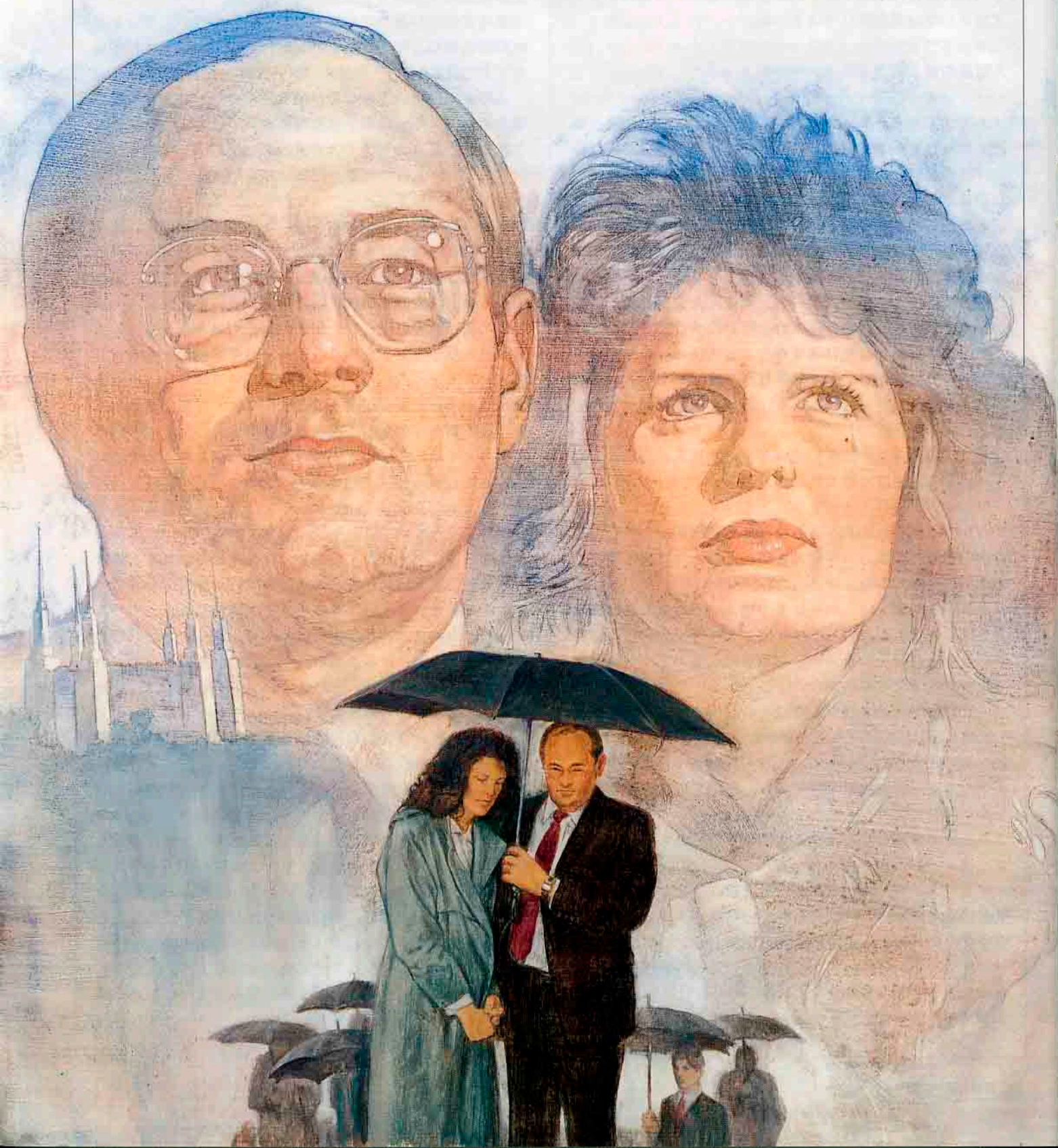
聖徒と共に涙を流すよりも罪人と一緒に笑った方がよい……私は決してそうは思いません。福音の喜びを味わった人は、もうつまらない世界に戻ることはありません。どんなに努力しても、どこへ旅しても、この世が与える喜びには、どこか空しさが残ります。この空しさは、みずからを永遠の真理に調和させ、神の定められた律法に従って生活する以外に埋めることはできません。

理解力が深まるにつれて、私たちは悟ります。悲しみの涙も実はこの上なく美しい涙であり得ること、そして、最後には永遠の喜びの涙に変わることを。

世の人々は真の喜びを知りません。私は福音が回復されたことに感謝しています。福音は真の喜びとは何か、どうしたらその喜びが得られるかを教えてください。聖徒と共に

に涙を流すことの尊さを一人一人が悟るように祈っています。□

*ブリガム・ヤング大学での講演より。



成就した祝福

スタントン・マクドナルド

私は医師として、死を間近にした人々と接する機会が数多くありました。しかし、ハミルトン夫妻ほど、感動的な思いを味わわせてくれた人々はそういません。



何日か過ぎましたが、ローラは昏睡状態のままでした。カールはその間、1度も病院の外へ出ませんでした。そのようなストレスが続けば、大抵の人は精神的な変調をきたすものです。しかしカールはその礼儀正しい態度を少しも変えることなく、悲しみの中にあっても私たちにその高潔な人格を示してくれました。

ローラ・ハミルトンは当時62歳で、長い間病床にありました。糖尿病がもとで目はほとんど見えず、その上ひどい関節炎を患い、心臓と肺にも慢性的な疾患を抱えていました。そのためか、とてもやつれて、年のわりには老けて見えました。

夫のカールは妻の病気を少しも重荷とは思っていませんでした。彼は健康で、元気はつらつとしていました。実際の年より10歳は若く見え、農業経営者として忙しく働いていました。私がふたりと接したのは2年間だけでしたが、その間カールはいつも妻を慰め、いたわることを第一に考えていました。

ローラの世話をするには、実に多くの時間が必要でしたが、カールはそのほとんどの仕事を、自分自身で、いつも元気に、また熱心に果たしました。それでも、結婚した子供たちが助けを買って出ることもありました。ローラにとっては、病院よりも家にいるときの方が、よい看護を受けられることが多いくらいでした。

ローラは2年の間に4度、しかもかなり長期にわたって入院しました。カールは病室のいすや折りたたみ式の簡易ベッドで寝ながら、いつも彼女に付き添っていました。病院の外でゆっくり食事したのは、子供たちが手伝いにきてくれたときだけでした。それでも、彼の口から、看護婦や病院の職員に、またほかのだれに対しても口やかましい言葉を聞いたことは一度もありませんでした。逆に、カールは私たちをほめ、感謝するだけでした。

しかしローラが最後にひどい発作を起こしたときには、カールも疲労で倒れる寸前までいきました。そのとき彼は昏睡状態のローラに神権の祝福を施しました。驚いたことに、彼は祝福の中で、ローラの体の機能が完全に回復すると約束しました。その祝福の言葉を聞いた私たちは、彼女の命を長らえさせるために、ありとあらゆる手段を尽くしました。

何日か過ぎましたが、ローラは昏睡状態のままでした。カールはその間、1度も病院の外へ出ませんでした。日増しに緊張と苦しみの表情が募り、カールも落胆の色を隠すことができませんでした。私は、その憔悴^{しょうすい}きった顔を見て、ひょっとして何も食べていないのではないかと思ったほどでした。ゆっくりと休めることはほとんどなく、とぎ

れとぎれの短い時間に仮眠するのが精一杯でした。ローラの激しい息遣いに少しでも変化があると、そのたびに目を覚ましては彼女の様子を見るようなことが何度も続きました。

そのようなストレスが続けば、大抵の人は精神的な変調をきたすものです。しかしカールはその礼儀正しい態度を少しも変えることなく、悲しみの中にあっても私たちにその高潔な人格を示してくれました。

ある土曜日、私はカールとローラのいる病室を出て、医師の休憩室に戻り、いすに腰を下ろしました。そしてカールが味わっている苦しみと悲しみについて考えると、目に涙があふれてきました。

私は頭を垂れ、医師として自分にできることが何か残されていないかどうか、また何かやり残したことがないかどうかを示してくださいと天父に祈り求めました。そして、ローラに与えられた神権の祝福についても主に尋ねました。なぜカールがそのような約束をしたのか、本当に靈感を受けて語ったのか、理解できなかったからです。

そのとき、私の心の中にひとつの考えが思い浮かびました。それは、ローラの体が完全に元どおりになるには、次の世へ行く以外にないということでした。以前にもそう考え、カールに話したことさえありました。しかしこのときは、大きな喜びの感情を伴って、思い浮かんできたのです。私はローラが完全に元どおりになった体で、明るく楽しそうにしている様子を思い描くことができました。

悲しみは去り、聖霊以外にはもたらし得ない喜びと安らぎを強く感じました。

ローラが安らかに永遠の眠りについたのは、それから数時間後のことでした。そしてカールも病院を後にして、家に戻りました。

私は、愛と犠牲という言葉の本当の意味を模範を通して教えてくれたカールに感謝しています。また、悲しみに打ちひしがれ、信仰までも揺らいだときに、啓示を通して安らぎと新たな確信を与えてくださった神に心から感謝しています。□

*スタントン・マクドナルド：医師。ヒーバー・ユタ東ステークス部会員。

寛 容

キリストのごとき愛に至る道

アン・N・マドセン

物心つき始めたころの思い出として私の心に残っているのは、父親のことです。父は争いごとの仲裁にかけては、非常に優れた人でした。家族の中でいさかいがあると、「もっと広い心を持ちなさい、同じ人はだれもいないんだ。人は皆、それぞれに違う。でもそれは決して悪いことじゃない」と言って、私たちの心を静めてくれたものです。

人間はそれぞれに異なる存在だということを私が理解するきっかけになったのは、父の言葉を覚えていたからだと思います。

ゴードン・B・ヒンクレー副管長は、私の父が教えた原則にも関連するひとつの問題を取りあげ、次のように述べています。「今の社会は批判の社会です。……人の欠点を探すのは簡単です。また……よほどの自制心が必要です。真理の敵は私たちを分裂させ、私たちの中に批判の態度を植えつけ、できるものならば私たちを神から授けられた目標からそらさせようと虎視眈々とねらっているのです。そのようなことを許してはなりません。」(『教会員数500万到達——発展への道しるべ』「聖徒の道」1982年7月号, pp. 85-86)

あら探しや他人への敵意が当たり前になっているこのすさんだ時代にあって、私たちはどう対処していくべきなのでしょう。毎日経験する不和や、自分の欠点にどう対処すべきでしょうか。

私は、信仰箇条の中のふたつの語句に、その答えの一部が示されていることを指摘したいと思います。信仰箇条の第11条にはこう書かれています。「われらは、自らの良心に従い、全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また、われらは、すべての人々にこの特権を許し、何所なりとも、如何様なりとも、または何なりともこれを礼拝することを妨げず。」

「すべての人々にこの特権を許し」という表現が、宗教面における寛容の精神をうたったものであることは言うまでもありません。私はこれを、あらゆる形の寛容の精神を包含するひとつの福音の原則であると考えたいと思います。私の父もそのことを私に理解させたかったのです。

もうひとつは信仰箇条第13条の中に書かれている「われらは……すべての人に善を行うべきを信ず」という語句です。これは第11条の「すべての人々にこの特権を許し」という語句とも関連があります。

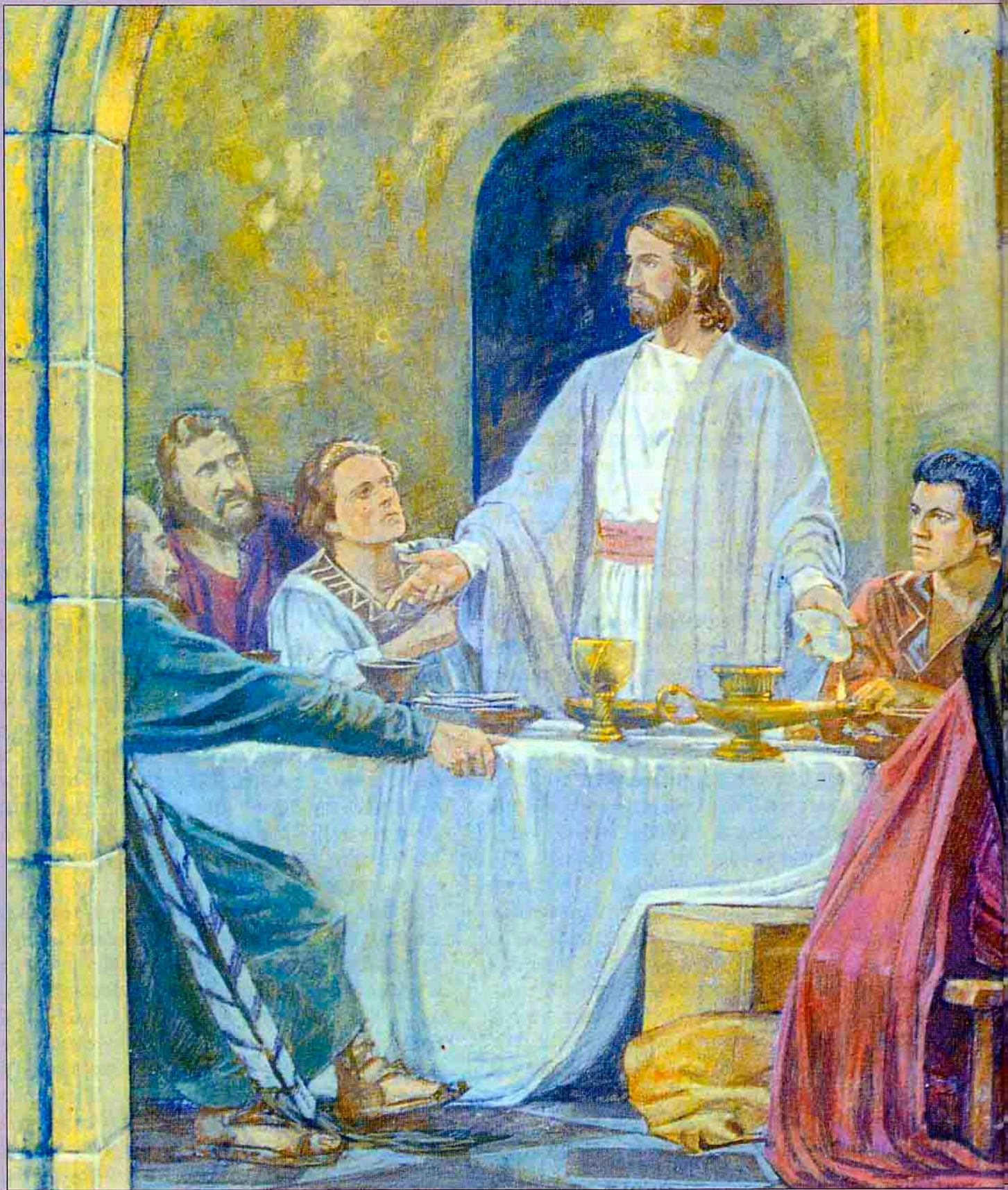
「すべての人に善を行う」というこの表現は「すべての人々にこの特権を許す」よりもさらにひとつ上の段階について言っているのではないのでしょうか。その特質は、慈悲の精神、あるいは救い主が持っておられるような愛と呼ぶことができるかもしれません。私は、寛容は慈悲に通じていくと信じています。また、寛容の精神なくして、キリストのような愛を身につけることはできないと信じています。そのような近道はないのです。

寛容の反対といえば、不寛容あるいは独善ということになります。これらは、ヒンクレー副管長が語ったあら探しや批判に類するものです。私たちがときどき周囲の人々に対して批判的になったり、不寛容になったりするのはいかなるのでしょうか。

それは、私の父が指摘した個々の人間の相違に起因するのではないのでしょうか。私たちは表面的な相違点を見て、自分と他人との間に壁を作ってしまう。そして、同じような服を着たり、同じような考え方や行動をしたりする人に対しては好ましい感情を抱くのですが、そうでない人には違和感を覚えてしまうのです。

たとえば、身体的な障害などを見て、違和感を覚えることもときにはあるのではないのでしょうか。もちろん、そうした相違点についてあからさまにとにかく言うような人はほとんどいません。しかし、そのような違和感を克服して、自分から親しい関係を築こうと努力する人は、はたしてどれほどいるのでしょうか。福音は、私たちの内に秘められた永遠なるものは、いかなる肉体的相違にも影響されないきずなをもたらしてくれると教えています。

人々の間には年齢の差という相違点がありますが、これは取り立てて問題にすべきものでもありません。私は35歳のときに、深く尊敬していた82歳のある老婦人から、「あな





たと友達になれてとてもうれしい」と言われたことがあります。愚かなことに、私はそれまでいわゆる「年齢の壁」を超えた友情が存在するなどは考えてみたこともありませんでした。しかしよく考えてみれば、私の知識の多くは、年上か年下かに関係なく自分より優れた人々から学んだことなのです。

相違点とはいっても、先に述べた身体的な相違のように、人間同士の関係に何の障害にもならないものもあります。文化的な相違と呼ばれるものも、ほとんどがその類のものです。この教会は全世界に広がる教会であり、異なる文化的背景を持つ人々が数多くいます。

このようなことを理解しておく、ほかの重要な相違点においても、人々と良好な関係を保つ助けとなります。その重要な相違点には、価値観、定義、真理、また私たちが証と呼ぶ宗教的確信の裏づけとなる体験なども含まれます。確かに、私たちは真理に固くつかねばなりません。しかし、真理を寛容、慈悲、愛の精神を妨げる障壁としてはなりません。人々を受け入れ、愛するとはいっても、彼らの考え方に従うとか、妥協的な態度をとるということではありません。これらの重要な事柄において違いがあるときには、なぜそのような違いが出てくるのかを理解するように努力しなければなりません。善良な人であっても、誤った考え方をすることがあり得るのです。

また真理を知り、正しい真実の原則を知っているというだけの理由で、すべての末日聖徒がほかの人々よりも優れているとか、正しいということにはなりません。確かに、神の真の教えを知っていることには、それなりの意義があります。しかし、本当に大切なのは、知識を得ているというだけでなく、その知識を実践することなのです。ジョセフ・スミスは次のように教えています。「正義を行なっている人々は皆、自分たちの正しさを自慢している。これは、私たちの心を独善的な気持ちで満たして、人の心の成長を妨げ、進歩を阻止しようとする悪魔の教えである。私たちが天父に近づけば近づくほど、打ちひしがれている人々にいたわりの目を向けたいと思うようになる。そして彼らを背負い、その罪を捨て去る助けをしたいと願うようになるのである。……もし神から慈悲を受けたいと願うなら、まず互いに慈悲を施し合わなければならない。」「(「預言者ジョセフ・スミスの教え」ジョセフ・フィールディング・スミス編、p.241)

福音は私たちに、弱点や罪を理由に兄弟姉妹を責めてはならないと教えています。真理を学び、実践するなら罪から逃れられることを、自分自身の生活を通して示すように教えているのです。サタンは、私たちがほかの人を責めた

り、批判したり、不正に裁いたりしているのを見て、大いに喜んでいるに違いありません。

私は何年前にも初等協会で教えた11歳の少年のことをよく思い出します。彼は「問題児」というレッテルを張られていました。しかし、彼を理解するにつれ、私はそのレッテルが不当なものであることを知りました。福音に対する知識が豊富で、レッスンの内容に退屈していただけたのです。ですから、彼の必要を満たすレッスンを行なうだけで問題は解決できたのです。

私たちは、自分自身を変え、悔い改めをしている兄弟姉妹を受け入れるだけの広い心を持っているのでしょうか。彼らがその生活を変えた後も、いつまでも同じレッテルを張ったままにしているのでしょうか。

最近、ある人が教会法廷で破門にされ、悔い改めの気持ちのないまま、怒りのうちに教会を去ったということを知りました。もしその法廷に出席していたら、「まあ、ゆっくり頭を冷やすことだね」などと言う人が結構いるのではないのでしょうか。また、「これでうるさい人がいなくなって助かった」などと考える人もいるかもしれません。しかし、ある高等評議員はその後数年間、彼が罪を悔い改め、再び教会に戻って活発になるまで、週に3度訪問し続けたといえます。

破門されて間もない人もいれば、長い期間を経た人もいます。私たちはそのような人々にどう接したらよいのでしょうか。「未婚の母」に対してはどうでしょうか。麻薬やアルコールの問題と戦っている青少年、あるいは伝道に出る年代の若人に対してはどうでしょうか。イザヤ書1章18-19節の勧めに従ってみてはどうでしょうか。

「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のよう^{くれない}に赤くても、羊の毛のようになるのだ。

もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる。」

これは福音の教えの中でも特にすばらしいメッセージです。しかし、私たちが愛をもって手を差し伸べなければ、まったく伝えることのできないメッセージでもあります。

ほかの宗教を信じる人に対しては、どう接するべきでしょうか。私たちは教義と聖約108章7節に書かれているライマン・シャーマンへの勧告を実践することができるのでしょうか。

「この故にすべての談話により、すべての祈りにより、すべての訓戒により、すべての行為^{おこない}によりて、汝の兄弟たちを強くすべし。」

この聖句には「すべて」という言葉が4度出てきます。例外が認められる余地はまったくと言ってよいほどありま

せん。

もし私たちが忍耐力を身につけ、すべての人に対し、彼らが自分なりのペースで真理を理解していく姿をおおらかな気持ちで受け入れることができるようになるなら、救い主の慈悲と愛にさらに大きく近づくことができるようになるでしょう。救い主はご自身を十字架につけた人々に対しても敵意を抱くことはありませんでした。救い主の模範は、いつの時代にあっても、寛容の精神から慈悲と完全な愛に至る道を示しています。救い主はご自分に敵する人々への怒りをあおり立てようとする企てをすべて退けられました。そして「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」（ヨハネ12：32）と言い、私たちが悔い改めることができるよう、ご自身をいけにえとして捧げられたのです。

私たちも救い主の模範にならって愛を示そうではありませんか。□



すべての教会員は宣教師

目的：末日聖徒は皆優れた宣教師になれることを
思い起こさせる。

「すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ 16:15) という主の戒めは、古代の弟子たちだけでなく、現代の私たちにも当てはまるものです。エズラ・タフト・ベンソン大管長はこう言っています。「私たちはもっと真剣に伝道活動に取り組む必要があります。……これまでのいかなる時代の人よりも、私たちは多くのことを期待されています。」(「聖徒の道」1985年7月号, p.6)

よく備えられた宣教師となるためにはどうしたらよいかという点について、モーサヤの4人の息子は私たちに良い例を示しています。彼らも人々に伝えることに恐れの気持ちを抱いたに違いありません。しかし、備えをするにつれ、「レーマン人の所へ行って神の道を宣べ伝える勇気が出た」のです。(アルマ17:12)

彼らは罪を悔い改め、福音に従おうと心から努力しました。(モーサヤ27:32-37参照)「神の道を知るために熱心に聖文を研究し」、「主がその『みたま』の幾分かを下したもうて自分たちと一しょに行かせ、……神の御手に使われて……同胞……に真理を悟らせ」ることができるように断食をし、また祈りました。(アルマ17:2-3, 9) 私たちは彼らの例を良い模範にすることができます。

M・ラッセル・バラード長老はこう述べています。「伝道するために、遠い街に派遣されたり、見知らぬ国に出かけたりする必要はありません。私たちの近所の人、友人、知人、家族、親戚、道を歩いている人、皆福音のメッセージを伝えるべき人々です。」

バラード長老は、伝道の進め方について、私たちの助け

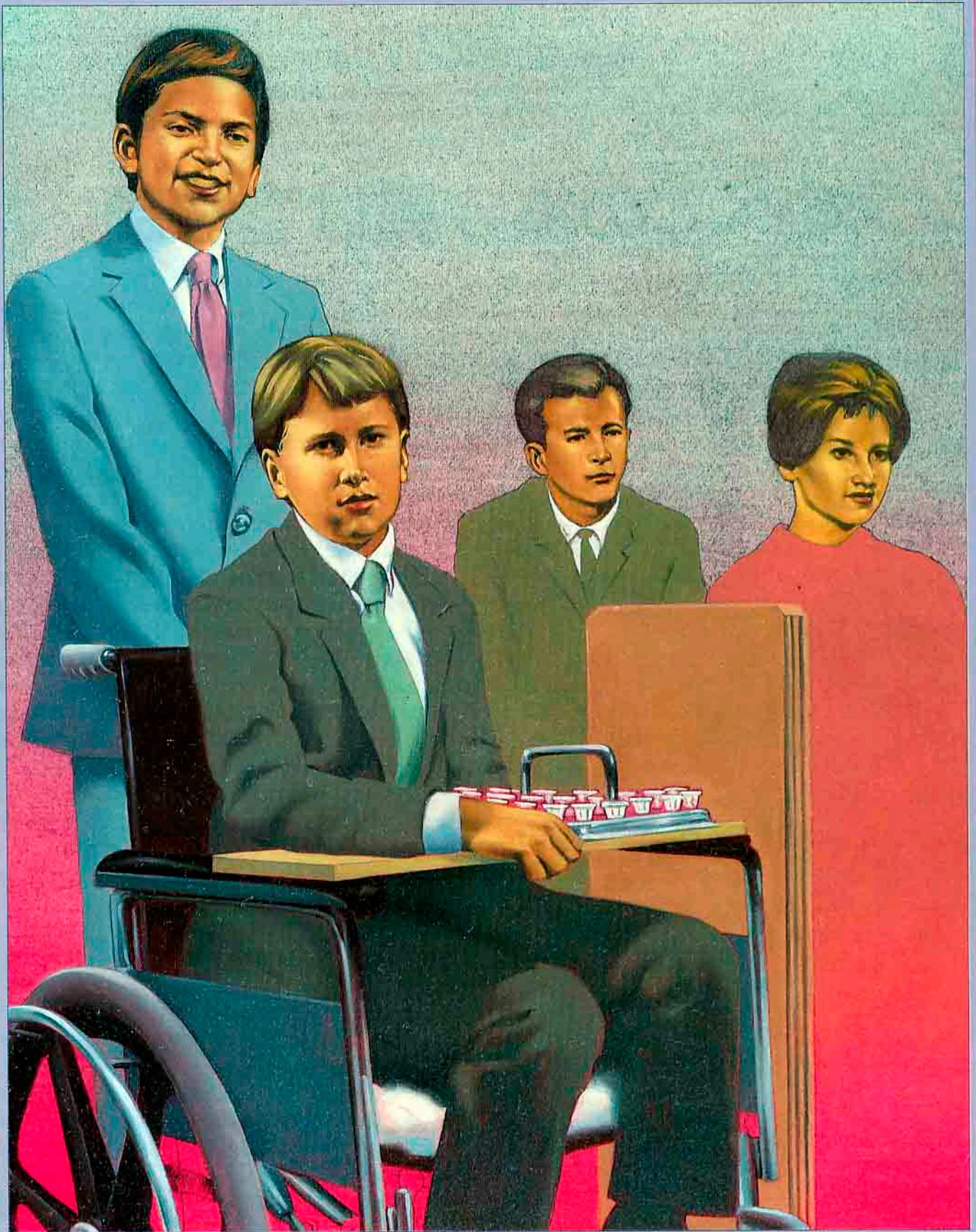
になる有益な手順を示しています。まず初めに、よく祈って、特定の日を定めます。その日までに福音の教えを聞くことができるようにだれかを備えさせるのです。次に福音を分かち合うよう主から望まれている人々について、断食と祈りを通して導きを求めます。バラード長老はこう約束しています。「主の靈感を受け、特別な霊的経験をなさることでしょう。……主は、この業について皆さんの目を開かせてくださいます。……思ってもみなかった人の名前を思い起こさせてくださるのです。……何を言いどのように接するべきかがわかるようになります。」

主の導きを求めて、伝道活動を行なうなら、自分自身とほかの人々の生活に大きな祝福をもたらすことができます。バラード長老は、「天父の子供の生活に、イエス・キリストの福音の光をもたらすことに匹敵する喜びはありません」と述べています。(「聖徒の道」1985年1月号, pp.16-18)

訪問教師への提案

1. アルマ17:26章を読む。備えをしてから伝道の業に働くという点において、どうしたらモーサヤの息子たちの模範に従えるかを話し合う。
2. 教会員でない人やお休み会員と福音を分かち合ったときの体験について話す。訪問先の姉妹に、福音を分かち合える可能性のある人について、導きを祈り求めるよう勧める。

(「家庭の夕べアイデア集」 pp.109-15, 208-209参照)



◆ カーメン・B・ピングリー ◆

障害者への援助

ワード部内に車いすの生活をしている12歳の少年を抱えたある監督は、巻き尺を持ってその子の家を訪ねました。歩くことも物を運ぶこともできないその少年のために、心あるこの神権指導者は、車いすの大きさを計り、そこに聖餐のトレイをのせる木製の棚を取りつけたのです。こうして、毎週神権者が交替で車いすを押し、少年が聖なる記念のパンと水を人々に配ることができるようになりました。そして、ワード部の会員たちはすばらしい愛の模範を目にすることになったのです。

特別な助けを必要とする会員の中にも、その人柄、能力のゆえに、人々から愛され、認められている人々がたくさんいます。それはほとんどの教会の指導者や会員たちが積極的に助けていることからわかります。けれども私たちはときどきみずからの無知を思い知らされたり、不安を抱いてしまうことがあります。ではそうした誤解に目を向け、それらをどう解決していったらよいか考えてみましょう。

誤解1：ワード部内には障害者が数人しかいないので、「特別な必要」を持った人がどういう人なのかよくわからない。

事実1：教会員の総数に対する障害者の数の割合は、全人口に対する障害者の割合とほぼ同じです。地域によっては相当数にのぼることもあります。

助けを必要とする会員がそれほど多くいると言われながら、教会内であまり見受けられないのはどうしてでしょうか。これには少なくとも次のふたつの理由が考えられます。

まず、障害のある人々の多くが外見上障害を抱えている

ようには見えないということです。目の不自由な人や車いすの利用者など、一見してはっきり障害のあることがわかる人の割合は小さなものです。ところが、外見上はまったく正常に見えても、学習機能や知能の障害、発声や聴力の障害、あるいは行動の障害などの障害を持った人がかなりたくさんいるのです。

もうひとつの理由は、障害を持った人があまり教会に足を向けたがらないということです。自分の心に次のように問いかけてみてください。教会に行っても居心地がよくなかったり、何が行なわれているかわからなかったり、参加する機会がまったくないとしたら自分は教会に行くだろうか。

誤解2：障害があるために教会に来れない人もいるが、それはほかの会員の活動に大した影響を及ぼさない。

事実2：障害を持つ人が教会で活動するならば、それは本人の家族全員に影響を及ぼします。

心身に障害を持つ人々は、敬遠されていると感じたり、周囲の配慮に不快感を抱くと教会から離れていきます。そうすると、家族のだれかが必ず家に残り、その人の世話をする必要が生じてきます。

ある知能障害の女の子を持つ親が次のように述べていますが、その言葉から皆さんは孤独感を感じ取ることができないでしょうか。「精神病の子供を抱えた家族は寂しい生活をしています。精神病は珍しいことではありませんが、多くの人はこの問題をなおざりにするか、あるいは避けたがります。また、障害者を家族の恥であるとか、家族に対する罰であると思っている人もいます。」



「障害者の問題に関心を向ける人はまだほとんどいません。」ある母親はこう言っています。「ワード部の会員たちは、この問題についてあまり話し合いをしません。家族だけが悩み苦しんでいます。私たちが経験した限りでは、教会外の組織に援助と指導を求めざるを得ないのです。」

またある特別な必要を抱えた息子をもつ母親はこう語っています。「新しいワード部に移ったとき、息子のように特別な助けの要る子供たちのためのクラスがあるかどうか監督に電話で尋ねました。何度か尋ねたのですが、何の連絡もありませんでした。そのあと訪問教師やホームティーチャーが、私たちが教会に行かない理由を尋ねてきました。私はもう一度、私たちが抱えている問題を話し、援助が得られないか頼んでみました。しかし何日たってもだれからも返事がありませんでした。そのうち、私たちは教会から離れるようになったのです。私は主人と離婚し、別の教会に行くようになりました。その教会では毎週日曜日に、障害を持つ子供たちのためのクラスを設けていたのです。そこでは宗教を問わず、だれでも歓迎してくれました。」

幸いにもこの女性は、後に、宣教師と出会って教会員となったある男性と知り合い再婚しました。その後家族は新しい場所に引っ越しました。新しいワード部の指導者たちは、彼らの必要に十分こたえてくれたのです。この家族はその後神殿で結び固められました。

以上の実例からわかるように、障害を持ったひとりの人の必要に対して周囲がどのように対応するかが、家族全員の生活や救いに大きな影響を及ぼすのです。私たちの愛や関心を必死に求めながら、いまなお悩み続けている家族がほかにもたくさんいます。私たちが関心を向けるならば、もっとたくさんの人々が、幸せな生活を送ることができるようになるのです。(こうした困難に立ち向かっている家族に対する理解をさらに深めたい方は、1984年10月の総大会におけるジェームズ・E・ファウスト長老の話『神のみ業』[「聖徒の道」1985年1月号]を参照してください)

誤解3：自分の行動に対して十分な責任をとれない人は、福音を学ぶ必要がない。

事実3：知能障害のある人々を含め、すべての人はできる限り福音の原則を理解しなければなりません。それは、この世の生活を救いの計画という観点から見ることでできるようになるためです。

福音の原則を学ぶことによって、障害を持つ人々は人生における試練に耐え抜く方法や安らぎを得ることができます。また理解力が深まり、忍耐や勇気、希望を抱き、ひとりの人間としての価値を持ち、愛されているという確信を持つことができるようになります。

こうした善良な人々は、たとえ障害があっても、主の王国においては大切な存在であることを認識する必要があります。そのような人々に教え、共に礼拝できることは、私たちにとってすばらしい特権なのです。

私が所属しているワード部の初等協会の教師は、手話を習いました。いくつもの重度の障害を持つ9歳の女の子と話ができるようになるためです。その教師はこのように話しています。「ヘレンのような子供に教える召しは、私の生涯で最も大きな課題ではありましたが、その報いも大きなものでした。私は心から心に伝わるよう教えていますが、ヘレンの顔をのぞきこむたびに、この世での生活が終わったら、神と共にいる彼女のところに行きたいと思うのです。」

障害を持った人々も、私たちと同じように愛され認められたいと思い、共に喜びを味わいたいと願っているのです。

ある若い女性の指導者は、熱意を込めてこう語っています。「すべての若い男女は今、主を礼拝することができます。何も千年や復活のときまで待つことはありません。自分なりの方法で、今できるのです。」

誤解4：助けようにも方法がわからない。

事実4：助けたい気持ちがあれば必ずできます。

助けられないという思い込みがよくない結果を招きます。ある父親はこう語っています。「監督が息子の状態や、私がこのような状況にどう対処しているかについて尋ねてくれたことはありません。これは本当に不思議なことです。なぜなら、私は幹部書記をしているんです。それにホームティーチャーも我が家の子供の問題に触れたことがありません。大祭司のグループリーダーでさえ、そのことについて私と話すのを避けているようです。」

監督やホームティーチャー、大祭司グループリーダーが感受性のない不親切な人というのであれば納得もできます。しかし、皆いい人たちばかりなんです。いろいろ考えてみてわかったのは、きっと何をしたらよいのかわからないのだろうということでした。」

私はよく、良きサマリヤ人のたとえ話の祭司とレビ人のことを思い起こします。道端に倒れていた傷ついた男の人を見たとき、彼らはなぜ道の向こう側を歩いて行ってしまったのでしょうか。悪人だったのではなく、ただ恐れをなしたのではないのでしょうか。どうすればよいのかわからなかったのだと思います。つまり思いやりが足りなかったのです。当然示すべきであった慈悲の気持ちよりも、無視や無関心、恐怖感の方が強かったのです。「彼を見て気の毒に思」ったのは政治上の敵であったサマリヤ人でした。そのサマリヤ人は男のために自分にできることをすべてなし、それからほかの人に必要の手当てを頼みました。(ルカ10：29-37)

このサマリヤ人のように、私たちもその気があれば助けることができます。必要なのは、困っている人に気づくことと、助けたいと望むことです。障害を持っている人々の



ことを、たまたま障害を負っているだけと考えてください。彼らも私たちと同じく、愛されたい、認められたい、参加したいと思っており、私たちと同じ喜びを味わいたいと願っているのです。

誤解5：心身に障害のある人々は能力に限界があるので一緒に活動することはむずかしい。

事実5：障害を持った人が、それぞれに合ったやり方で参加する方法はたくさんあります。

教会のために個人があるのではなく、個人のために教会があるということを忘れてはなりません。教会のプログラムを個々の必要に合わせていくには、感性和靈感が求められます。

私は次のような人たちを知っています。車いすの上からワード部を管理している監督や、誇りを持って託児クラスで奉仕をしている精神的に障害のある扶助協会の姉妹、そしてまた聴力に障害がありながらも日曜学校の教師として働いている姉妹などです。また首から下が完全に麻痺している若い男性が、専任宣教師として働き、その伝道部では200名以上もの改宗者が出たという例もあります。

ある高等評議員はこう言っています。「私は目が見えませんが、ワード部やステーク部で大切な召しを受けてきました。人々は、ごく普通の人に接するように私に接してくれ

ます。障害があるために不都合なことは何ありません。しかし最初からずっとそうだったわけではありません。このように人々にわかってもらえるまで何年かかかりました。」

障害のある人が、ステーキ部長の召しを受けようと、集会後の明かりを消す役目を受けようと、主の王国で働ける喜びに変わりはないのです。

誤解 6：障害を持つ人々を気の毒には思うが、正直なところ、これ以上何か特別なことをする時間はとれない。

事実 6：障害者を助けるとは、何か新しいプログラムを設けるのではなく、これまでとは違う態度を示すことです。今以上に時間をとるのではなく、今以上に心を向けるのです。

数年前、私たちは家族で末日聖徒のスカウト訓練キャンプに参加しました。年上の子供たちは皆活動に加わり楽しい時間を過ごしていました。ところが自閉症の9歳の息子ブライアンはとてもつらい思いをしていました。そのカブスカウトの行事では、言語障害を抱えた人たちのためには何も計画されていなかったのです。見た目は普通ですが、実際には障害を持っている息子が、うまく話せなかったり行動できなかったりすることがありました。そのようなときに人々が示したいらだちや寛容さを欠く態度を見て、私は心が痛み、自尊心が傷つき、落胆しました。情けない気持ちになったのは、周りの人たちがばかりでなく、息子とて同じだったのです。

そこで、キャンプでの扶助協会の集会の中で、私はブライアンの障害について説明し、いろいろと苦難を乗り越えながら育てていることを話しました。その後姉妹たちは、自分の子供たちに事情を話して聞かせました。やがて1時間もしないうちに、キャンプ中の人々がブライアンのことを理解してくれました。

人々の接し方があれほど大きく変化し、温かい愛の気持ちを示してもらったのは初めてでした。そのとき私は次のような確信を強めました。教会の中にはほかの人の必要を知りさえすれば、躊躇なくキリストのような愛を示す素晴らしい人々がたくさんいると。人々もそのような接し方を

通してさらにすばらしい人に成長していくのです。

「カートもまた運動機能障害を持ったダウン症候群のスカウトです。」ある神権指導者はこう語っています。「カートは私たちの団と一緒に30キロほどのハイキングに出かけました。16キロほど行った所で彼の歩調が乱れ始めました。しかし彼の前にいた父親と後ろにいた隊長の助けによって、最後まで自分の足で歩くことができました。私たちは彼が到着するまで何時間も待ちました。

カートとその一行の姿が見えると、みんなは促されたわけでもなく、自分から声援を送りました。カートは目的地に近づくと誇らしげに走りながらこう叫びました。『やった、やったぞ。みんなぼくを応援してくれた。ぼくにもできたんだ。』だれの目にも涙があふれていました。あの日の教訓は決して忘れることがないでしょう。』

イエスはこのように言われました。「汝らの中にて今病める者あるか。その者たちをここに連れ来れ。汝らの中にて足なえ、めくら、びっこ、かたわ、らい病人、癱えたる者、つんば、またはいかなる病にてもあれ悩める者は、その者たちをここに連れ来れ、われは汝らを憐む。」(III ニーフアイ17：7)

この慈愛に満ちた救い主は今もなお生きておられ、たとえ障害や弱点があっても、私たち一人一人を愛してくださっているのです。私たちが主の足跡をたどり、主の模範に従うことができますように。また主の特別な子供たちのために奉仕したいという気持ちが高まりますように。さらに恐れを克服して憐れみの心を持ち、彼らを愛し、教え、主の王国で共に働くことができるよう心から願っています。

意識を改め、真のフェローシップ精神をもって、特別な必要を抱えた人々をキリストのみもとに招こうではありませんか。いいえ、むしろ私たちの方が彼らによって導かれているのかもしれませんが。□

*カーメン・ピングリー：ソルトレーク・ボネビルステーキ部エール第2ワード部会員。前中央初等協会管理役員。現在は、特別な必要を抱える会員のための評議会で活躍中。(ブライアン・ピングリーと自閉症児に関する記事については、「聖徒の道」1984年3月号を参照)

あなたは正しいことを しているのです

ジュリー・ハウィラー

高校を卒業してバプテスマを受けて以来、私の生活はこれまでになく幸福で満ち足りたものとなりました。私は教会を心から深く愛しています。

聖典を学び、祈り、いろいろな責任を果たし、活動に参加していくうちに、私の証は前よりもずっと強くなりました。また聖霊の賜の力によって行動するようになってからは、福音が真実であり、すばらしいものであるということもわかるようになってきました。そんな折、ある反モルモンのテレビ番組が地元のキリスト教放送局で放映されたのです。それまでの私はいかなるものも私の信仰をぐらつかせることはできないと自負していました。私が見たのはごく一部でしたが、見ているだけで不愉快になり、次第に恐怖と憤りを覚え、こう思いました。「私たちのことをよくもあんなふうに言えるものね。あんなうそを私たちが信じると思うのかしら。」

しかし、その番組を見た後のむなしく暗い気分から、なかなか抜け出ることができませんでした。すると突然、このような思いにかられたのです。もしも教会が本当に真実でなかったらどうなのだろう。我ながら驚きました。教会員としてこれまでたくさん祝福を受けてきたにもかかわらず、私の心の中に疑いの気持ちが始まったのです。

数日後、夫のポールは何かしら心動かされて、私に神殿に行く気がないかと尋ねました。しかし、当時私たちが住んでいた所から最も近い神殿でさえ1,000キロ近くも離れていたのです。簡単に、ちょっと荷物をまとめて出かけるというわけにはいかないのです。

ポールは、車ではなく飛行機で行くことを提案しました。切符を買っても少しおつりがくるくらいの旅費もありました。

私はしばらく考えてから熱心に祈りました。そして行くことに決めました。この旅は私にとって重要な意味があると思ったからです。

神殿で味わった平安な気持ちはすばらしいものでした。しかし、私の心の中にはまだ疑問が残っていました。自分はここで何をしているのだろうか。神殿とは、教会とは何なのだろう。



そんな疑問をぬぐえないまま、私は最初のセッションを終えました。次のセッションでは幾分気持ちが楽になって、前よりももっと内容に集中することができました。

そしてまったく思いがけないときに答えが与えられました。温かくやさしいみたまが私にこうささやきかけたのです。「あなたは正しいことをしているのです。」この穏やかな確信は、たちまち私の疑いを取り払ってくれました。

私は悪魔の働きかけに惑わされ、心を悩ませてしまいました。しかしそのような悩みの経験を通して学んだことに感謝しています。私の証はこの経験を通して前にも増して強いものになりました。□

質・疑・応・答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教義を公式に宣言するものではありません。

幼児の命名と祝福は、救いの
ために必要な儀式ではありません。
それなのに、なぜ重要
なのでしょう。



スーザン・イーストン・ブラック
ブリガム・ヤング大学
教会歴史および教義担当準教授

幼児に命名し祝福を授けることは、神から与えられた
戒めです。1830年4月に、主は予言者ジョセフ・ス
ミスを通して次のように言われました。

「すべて皆、子女を有するキリストの教会員は、その子
女を集会に於て長老たちの許に連れ来り、長老たちはイエ
ス・キリストの御名によりて^{おと}按手^{もと}を施し、且つ御名により
てこれに祝福を授くべきものとす。」(教義と聖約20:70)

幼児に命名し祝福を授けたことを証明する記録は、教会
の初期にはそれほど多くありませんが、そのような祝福は
確かに行われていました。1834年4月21日にオハイオ州メ
ディナ郡ノートンで開かれた大会で書記を務めたオリヴ
ァ・カウドリは、次のように記録しています。「スミス大管
長はそれから、何人かの子供たちの頭に手を置き、主のみ
名により祝福を授けた。」(「教会歴史」2:54)

1843年3月13日の夜に開かれた教会の集会でも、予言者

ジョセフ・スミスは子供たちに祝福を授けています。その
ときのことについて予言者は次のように書いています。

「27人の子供たちに祝福が与えられた。その内の19人
には私が熱烈な祝福を授けた。心身の力が抜けて、私はぐっ
たりしてしまった。……」

(翌日) ジェデダイア・M・グラント長老が、昨晚子供
たちに祝福を授けているとき、私の顔面から血の気が失せ、
ぐったりしたのはなぜなのか、とその原因を尋ねた。私は
こう説明した。ルシフェルがその威力を振るって祝福を受
けている子供たちを滅ぼそうとしていることがわかった。
そこで、私は信仰と霊の限りを尽くして、その子供たちの
生命がこの地上で安全に守られるよう、祝福を結び固めた。
すると、私の中から力が抜けて子供たちに注ぎ込まれ、そ
のために私はぐったりしてしまった。現在まだすっかり回
復してはいない。さらに、イエスのみ衣のふきに触れた女
の話もした。(ルカ8章)」「(「教会歴史」5:303)

ジョセフ・スミスは主がみずから示された戒めと模範に
従いました。実際に、救い主は古代のイスラエルでもまた
アメリカ大陸でも子供たちに祝福をお授けになり、こう言
われました。「『幼な子らをわたしの所に来るままにしてお
きなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国
である。……』」

そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。」(マ
ルコ10:14-16)

モルモン経の中にも、贖い主がニーファイの民の中で恵
みと導きを施している間、幼い子供たちに祝福を与えられ
たという記録があります。(IIIニーファイ17参照)イエスは
民に向かい、その子供たちをご自分のもとに連れて来るよ
う言われました。(11節)それから、群衆と共にひざまずい
て、天父に祈りを捧げられました。(15節)祈りの後で、救
い主は子供たちにひとりずつ祝福をお授けになりました。

(21節)そして、「子供たちもまた火に取りかこまれ、天使
らは子供たちに祝福を与えた」(24節)のです。

子供たちは「世の始めより贖わ」れている(教義と聖約
29:46)のに、それでもイエスは子供たちに祝福を与えら
れました。子供たちに祝福を授けるという救い主の模範に
ついて、ジョン・テイラー長老は、神権者は「進んでこの
模範に従うべきであって、ためらったり、異論を唱えたり

してはならない」と書いています。(「ミレニアル・スター」1878年4月15日号, 40:235-36)

興味深いことに、聖典の中で誓約が結ばれるときには、新しい名前をつけることがよくあります。アダムとイヴが地にあるものをすべて治めよと言われたとき(創世1:28参照)、アダムは動物に名前をつけるよう命じられました。

(創世2:19-20参照)同様に、イヴを妻として受け入れたとき、アダムはその妻にイヴという名前をつけました。

(創世3:20参照)神ご自身も、私たちの最初の両親の肉体を創造されたあとで、「彼らを祝福して、その名をアダムと名づけられた」(創世5:2)とあります。

後に、エホバがアブラムと契約を交わしたときにも、アブラムの名前はアブラハムと変えられました。(創世17:5参照) また主はアブラハムと交わしたと同じ契約をヤコブと交わすときにも、同じようにヤコブの名前を変えられたのです。(創世35:10参照)

私たちもバプテスマの水に入ってキリストと誓約を交わすときに、同じことをします。つまり、バプテスマを受けるとキリストのみ名を引き受け、以後私たちはそのみ名によって呼ばれます。(モーサヤ5:7-12参照)神殿でさらに高い誓約を交わすときにも、新しい名前を授けたり、授けたりするのです。

どの場合でも、新しい名前を授ける者には名前を授かる者を守り、愛し、育てるという責任があります。一方、名前を授かる人は、命名者を敬い、その勧告に従います。

このように考えると、天父の霊の子供がこの世に送られるときに、その子に神権の権能を持つ者から新しい名前が与えられるのはふさわしいことです。その子の肉体の創造に携わり、この世で育てるようその子を神から託された人が命名するのがよいでしょう。理想的には、父親(母親)と子供のこの新しい関係は、族長制度と呼ばれる契約関係の一部として永遠に続きます。ジョセフ・F・スミス大管長はこの関係について、次のように言っています。

「族長制度はその起源が神にあり、今も永世にも存続するものである。それゆえに、老若男女を問わずあらゆる人は、神の民の家を治めるこの制度と権威をよく理解すべきである。また、神が意図されたように、神の子らが昇栄する資格を得るための備えとしてこの制度を用いるべきであ

る。家庭の管理権は常に父親に与えられている。家事や家族の事柄に関してこれ以上の権威はない。……

この権威は重大な責任と権利と特権とを伴う。人はどんなに模範的な生活をしてもしすぎることはない。また家族という組織において、神が定められたこの重要な行動規範にいくら注意深く従って生活してもしすぎるということもない。」(「福音の教義」pp. 278-79)

さらにスミス大管長は、父親が月例の断食集会の中で自分の子供に命名し、祝福を授けることは、「まさしく父親の祝福の本質にかなったものである」から「あらゆる点からみても正しい」と言っています。(同上, p.282)

だからと言って、父親がメルケゼデク神権を持っていなかったり、あるいは何らかの理由によって祝福を授けることができない場合、その子供がこの祝福を受けられなくなるということはありません。監督は、そのワード部の管理神権者としての鍵を持っており、だれかほかの長老を指名して祝福を授けるよう依頼する権限があります。いずれにせよ、子供に祝福を授ける長老は、みたまの導きを受けられるように準備をしなければなりません。

忠実であるなら神から与えられると約束された祝福を受けられるように、両親は子供を助けなくてはなりません。教義と聖約68:25-28には、両親はその子供を教えなければならないという戒めがはっきりと書かれています。

「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーク部内にて子供を有する両親あらば、その子供八才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。……」

また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」

要約すると、幼児の命名と祝福は神の戒めです。ふさわしい父親がその子供に命名し、祝福を授けることは正しいことです。子供の祝福はキリストの時代にも行なわれていましたし、回復された教会の初期にも行なわれていました。それ以来、この儀式は教会員が正式に行なう儀式となっています。□

みたまが奏でる曲

ヘッキー・トーマス

私はいろいろなことを考えながら、大学の図書館に向かって急いで歩いていました。太陽はまばゆく、青空を背景に山々が雄々しくそびえ立ち、まるで私に立ち止まって見上げるようにと語りかけているかのようでした。しかし、そんな時間はありません。こんなに美しい日だというのに勉強しなくてはならないのです。私と同じように中間試験に追い立てられているほかの学生たちが、そばを通り過ぎていきました。あの人たちは私のようにひどい苦勞をしていないだろうなと思いました。でも、そのような暗い考えはやめ、今度こそ頑張ろうと自分に言い聞かせました。そして、大学の図書館に入りながら、人文学のテストに備え、知っておかなければならない作曲家について頭の中で復習しました。

音楽はいつも私の生活の一部でした。私は作曲がとても好きなだけでなく、簡単なメロディーに歌詞をつけるのも大好きでした。あるときは、心の中の思いを表現するまじめな歌詞をつけ、またあるときは、子供を楽しませるようなごくたあいな歌詞をつけました。ところが今は、大学で人文学の勉強をしながらこんな苦勞をしているのです。ここ数週間頑張ってきましたが、なかなか必要な事柄を覚えることができませんでした。きょうはよく頭に入るかもしれないと思い、手早くコートをいすにかけ、教科書を開きました。モーツァルト、ヴォルフガング・アマデウス、1756年オーストリアに生まれ、1791年に亡くなる。作曲家モーツァルトは……。

すると、またいつものようなことが始まりました。「きょうはやめてください。どうかきょうはやめてください。」私は心の中で祈りました。暗くもやもやした思いが、頭の中に入り込んできました。2週間、ずっと私はこの思いと戦っていました。大切なことに精神を集中しようとする、いつもそれが始まるのです。暗く邪悪な思いが外部から私の心に入り込んで、ほかのことは何も考えられなくなってしまふのです。最近改宗したばかりの私は、サタンの力に

打ち勝つ方法を学んだばかりでした。私は祈り、主に助けを求めました。しかし、依然としてこの黒雲は私の心を覆い、本を読むことも勉強することもできませんでした。

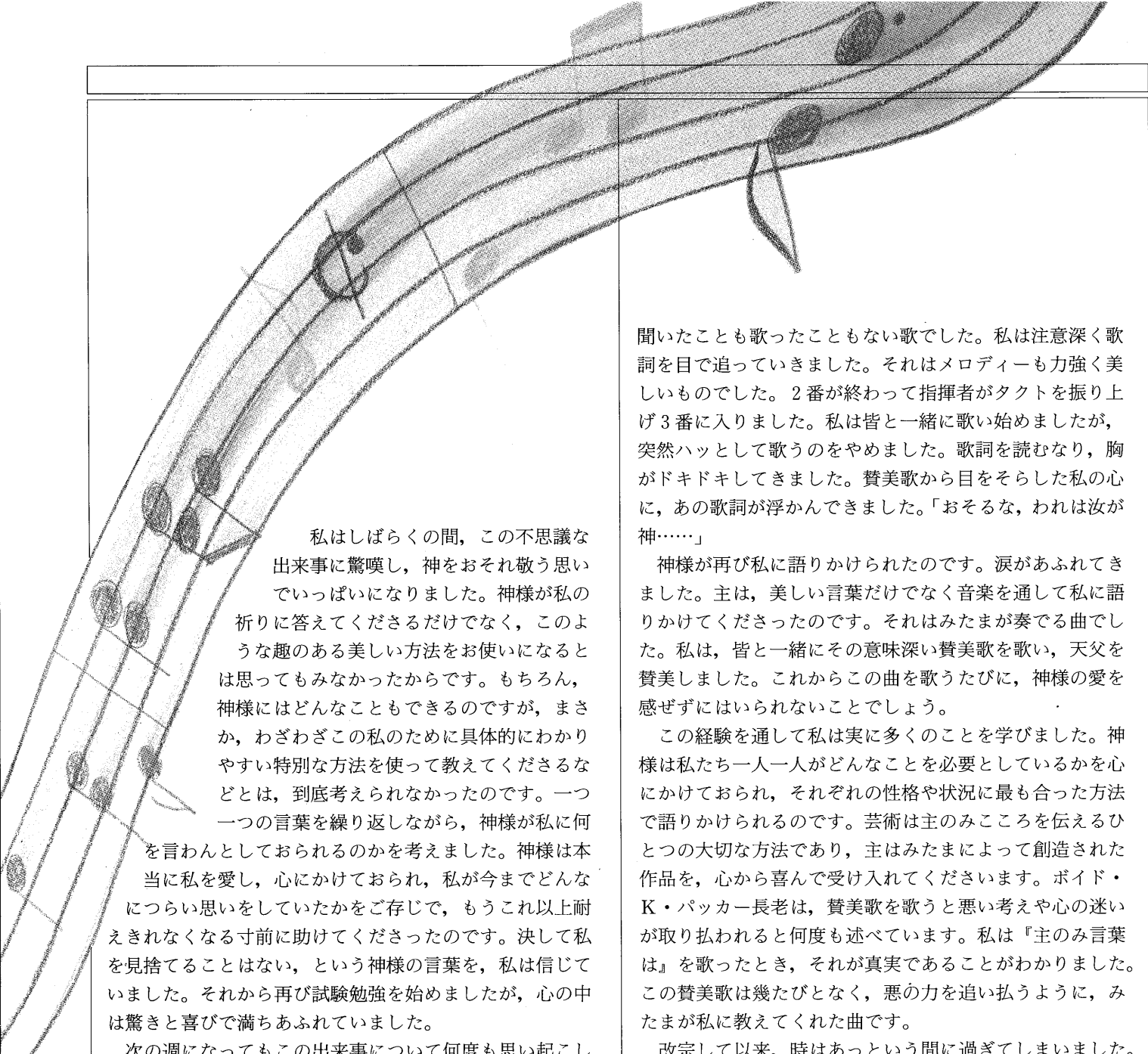
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。17……に生まれ、16……。どうしても覚えることができません。心が逆の方向に引っぱられるのを感じました。覚えようとしても、黒いもやが思考をじゃまするのです。モーツァルト……次は何だっけ。言葉がただ頭の中で勝手に跳びはねているようで、ちっとも考えがまとまりません。さあ、もう一度。暗い考えは気にしないことにしよう。だれについてだったっけ。再びモーツァルトの生涯について書かれたページに視線を戻しました。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、1756年生まれ、……。するとまた、下品な言葉が次から次へと思い浮かんできました。

悪の力が強まれば強まるほど、心のいらだちも激しくなりました。頭の中は爆発しそうでした。涙が込みあげてきました。「お願いします。天のお父様、どうか助けてください。もうこれ以上、とても耐えられません」と心の中で嘆願しました。

すると、すぐに天父は祈りに答えてくださいました。黒い雲の中を光が差し込むように、美しい詩が心に浮かんできました。ただ詩が浮かんだだけではなく、その言葉がはっきりと心に刻み込まれて、一度だけでももう再び忘れることはありませんでした。どの言葉も鮮明で、意味深いものでした。あれほどの精神的苦痛が、瞬時にして消え去り、その後にこの美しい希望のメッセージが聞こえてきたのです。

「おそろな、われは汝が神
常に汝と共にあり
助け与え、強くして
わが正しき力をもて
汝をささえ励まさん」





私はしばらくの間、この不思議な出来事に驚嘆し、神をおそれ敬う思いでいっぱいになりました。神様が私の祈りに答えてくださるだけでなく、このような趣のある美しい方法をお使いになるとは思ってもみなかったからです。もちろん、神様にはどんなこともできるのですが、まさか、わざわざこの私のために具体的にわかりやすい特別な方法を使って教えてくださるなどとは、到底考えられなかったのです。一つ一つの言葉を繰り返しながら、神様が私に何を言わんとしておられるのかを考えました。神様は本当に私を愛し、心にかけておられ、私が今までどんなにつらい思いをしていたかをご存じで、もうこれ以上耐えきれなくなる寸前に助けてくださったのです。決して私を見捨てることはない、という神様の言葉を、私は信じていました。それから再び試験勉強を始めましたが、心の中は驚きと喜びで満ちあふれていました。

次の週になってもこの出来事について何度も思い起こしました。心に浮かんだ詩を思い返すたびに、新たな力がわきあがり、幸せな気持ちになりました。神様についてそれ以前に読んだ事柄は、もはや単なる言葉ではありませんでした。神様は地上にいる私たち一人一人を確かに知っておられ、心にかけておられます。この経験によって聖典の言葉がいきいきとした意味深いものになりました。また、教会の集会からも今までとは少し違ったものを得られるだろうと思いました。すると、少し違うどころか、思ってもみないようなことが起こったのです。

安息日になり、私は支部の聖餐会に出席しました。集会が始まり、皆が開会の賛美歌を歌い始めました。今までに

聞いたことも歌ったこともない歌でした。私は注意深く歌詞を目で追っていきました。それはメロディーも力強く美しいものでした。2番が終わって指揮者がタクトを振り上げ3番に入りました。私は皆と一緒に歌い始めましたが、突然ハッとして歌うのをやめました。歌詞を読むなり、胸がドキドキしてきました。賛美歌から目をそらした私の心に、あの歌詞が浮かんできました。「おそるな、われは汝が神……」

神様が再び私に語りかけられたのです。涙があふれてきました。主は、美しい言葉だけでなく音楽を通して私に語りかけてくださったのです。それはみたまが奏でる曲でした。私は、皆と一緒にその意味深い賛美歌を歌い、天父を賛美しました。これからこの曲を歌うたびに、神様の愛を感じずにはいられないことでしょう。

この経験を通して私は実に多くのことを学びました。神様は私たち一人一人がどんなことを必要としているかを心にかけておられ、それぞれの性格や状況に最も合った方法で語りかけられるのです。芸術は主のみこころを伝えるひとつの大切な方法であり、主はみたまによって創造された作品を、心から喜んで受け入れてくださいます。ボイド・K・パッカー長老は、賛美歌を歌うと悪い考えや心の迷いが取り払われると何度も述べています。私は『主のみ言葉は』を歌ったとき、それが真実であることがわかりました。この賛美歌は幾たびとなく、悪の力を追い払うように、みたまが私に教えてくれた曲です。

改宗して以来、時はあっという間に過ぎてしまいました。数年前、私は中央アメリカのホンジュラスに伝道に召されました。伝道に出るとき、見送りの人たちの中のひとりの姉妹から、小さな木製のハートをプレゼントされました。その姉妹は、伝道に出る人にはいつも小さな木でできたハートに、賛美歌『主のみ旨に従いゆかん』の歌詞を書いてプレゼントしているそうです。ところがなぜか今回は別の賛美歌にしたいという気持ちがしたというのです。私は受け取る前にその賛美歌が何かわかりました。指でその歌詞をたどりながら涙がほおを伝いました。すでに私の心に主が刻み込んだあの賛美歌でした。「おそるな、われは汝が神、常に汝と共にあり……。」□

信仰の眼

七十人第一定員会会員

ロバート・B・ハーバートソン

止まって祈る
信仰ではなく、
走りながら祈る
信仰を
持ちましょう。

ある夕方、ふたりの少年が家に向かっていた。あたりはもう薄暗く、いつもならとうに帰宅している時刻でした。困ったふたりは少しでも早く帰れるように、牧場を横切って近道することになりました。牧場に入ってはならないことはふたりとも知っていました。大きな暴れ牛がいるので、牧場には「立ち入り禁止」の立て札が立っていたからです。でもすでに暗く、しかも牛は少年たちが見えない場所にいたので、ふたりは近道をしようと決心したのです。はいつくばってさくの下をくぐり、牧場の中を途中まで進んでもう戻れない場所に来たとき、牛が少年たちを見つけ、突進してきました。ふたりは駆け出しましたが、ひとりが止まってこう言いました。「待って、ひざまずいて祈ろうよ。」すると、もうひとりは、こう答えました。「ひざまずいて祈りたければそうすればいい。ぼくは走りながら祈るよ。」

きょう私がお話したいのは「止まってひざまずいて祈る」信仰ではなく、「走りながら祈る」信仰についてです。私はこれまでずっと、そのような信仰の在り方を信じてきました。ヤコブ書にはこう書かれています。「信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。」(ヤコブ2:17)

ハロルド・B・リー大管長はかつてこのように述べまし

た。「祝福を願うなら、ただひざまずいて祈るだけではいけません。願う祝福を受けるのにふさわしくなるために、できる限りあらゆることをして、自分を備えるのです。」私たちはときどき、十分な信仰さえあれば何でもできると思うことがあります。そして、「全力疾走しながら祈る」のではなく、努力を惜しみ、できる限りのことをしないで済ましてしまうのです。しかし主は私たちに、信仰を用いて自分にできることは、

すべて自分でするように期待しておられます。

このような信仰はどうすれば養われるのでしょうか。アルマ書にはこう書かれています。「信仰と言うことについて私はすでに言った。信仰と言うことは、完全に物事を知ることではない。今私の言っている言葉についてもその通りである。すなわち、信仰が始めから完全に物事を知ることではない。今私の言っている言葉の確なこともあなたたちは始めから完全には知ることができない。」つまり、信仰とは完全に物事を知ることではないのです。しかし私たちは、アルマが続けて言うように「目をさましてふるいたち、(アルマ)の言葉を実際にためしてみ」なくてはなりません。

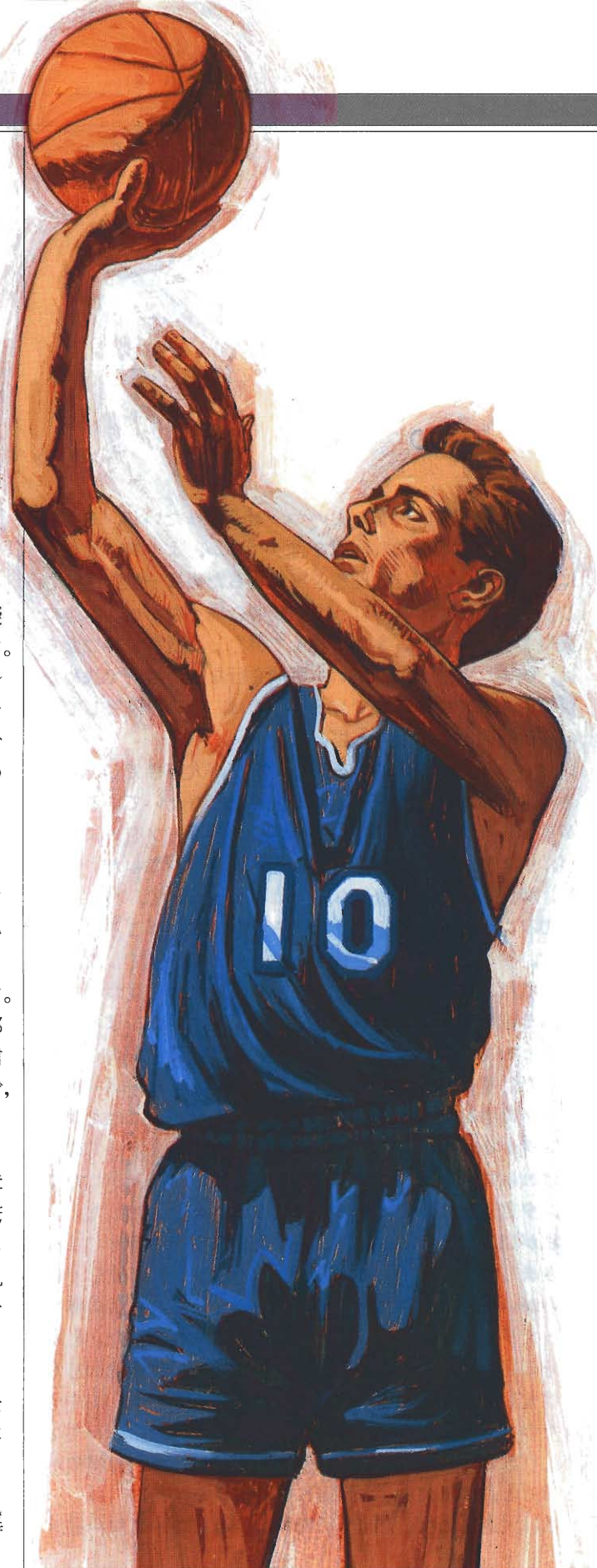
(アルマ32:26-27参照)

皆さんの中には、自分のすべきことをよく知りながらも、学業の問題や道徳的な問題で悩んでいる人がいることでし



よう。また、福音が真実であるかどうか、疑問を抱いている人もいると思います。様々な難問があるために、自分の信仰に疑問を持つようになるのです。でも、どうか皆さん、アルマが民に勧めた次のような言葉に従ってください。「少しなりとも信じながら私の言葉を実際にためしてみるならば、たとえ信じようとする望みを起すだけでもよい。」できることから始めてください。ただ、信じたいと望むだけでよいのです。アルマはこう続けています。「しかし、私の言葉の一部分でも受け入れるほどの信仰ができるようになるまで、この望みを育ててゆけ。」(アルマ32：27)

モロナイはイテル書12章5節で、「イテルは大きな驚嘆すべきことを民に予言したが、民は親しくこれを見なかったでそれを信じなかった」と教えています。民はイテルが予言したことを見るができなかったで、イテルの言葉を信じようとしなかったのです。18節と19節でモロナイはこう言っています。「いつ何時



ブザーが鳴り終わったとき、私はふとこう思いました。「こんなことが前にあった。」そうです。あの裏庭で、今と同じことを何百回も心の眼で見たのです。

でもまだ信仰のない中に奇蹟を行なった者はない、すべて奇蹟を行なった者はまず神の御子を信じた。キリストが降誕したもう前にも非常に信仰の深い人が多くあった。これらの人々は信仰が深いによって幕の内を見ることを禁ずることができないので、すでに信仰の眼を以て見たものを肉眼で見ることでできて喜んだ。」

この信仰の眼とは何でしょう。私たちは将来起こる出来事を実際に見ることができるのでしょうか。私はできると思います。ただそのためには、進んで十分

この信仰の眼とは何
でしょうか。私たち
は将来起こる出来事
を実際に見ることが
できるのでしょうか。
私はできると思いま
す。

な時間を取って、何をしたいか、どうなりたいか、ある特定の状況でどう行動し、何を言うべきか、よく考えなければなりません。自分の理想を実現するために一生懸命努力し、信仰の眼でそれをはっきりと心に描くならば、本当に実現するでしょう。また、進んで努力し、信仰を持つならば、的確な判断をし、正しい事柄を行ない、自分で決めた目標を達成できることでしょう。では、その一例として私の経験をお話したいと思います。

幼いころ、私はボールを使った遊びが大好きでした。大きくなるにつれ、主から運動の才能をいただいていることがはっきりしてきました。いろいろなスポーツをしましたが、中でも一番好きなのがバスケットボールでした。しかし、我が家はあまり豊かな方ではなかったため、バスケットのリングにボールを投げ上げられるだけの年ごろになっても、リングやボールを買ってはもらえませんでした。そこで私は、木の樽^{たる}についていたブリキのたがを見つけてきて、それを家の壁に打ちつけました。それから、ぼろきれをまとめてしっかり縛り、ほどよい大きさのボールを作りました。私は学校から帰ると毎晩外に出て、布のボールをリングの中にシュートしました。布ボールが当たるたびにリングがゆがむので、何度もガレージの屋根に上って直さなければならませんでした。布ボールのシュートがしたくて、夕方になると家に帰るのを待ちかねたものでした。

私が13歳のときでした。ある日父が私を引き寄せてこう聞きました。「ボビー、本物のバスケットリングが欲しくはないかい。」父はバックボードをこしらえ、それに鉄の棒で作ったリングを取りつけたものを見せてくれました。私は自分の目を疑いました。ふたりでそれを家の裏の壁に打ちつけました。そして、父はゴム製のバスケットボールをくれたのです。それは私が初めて手にした本物のボールでした。うれしくて私は飛び上がりました。それからは学校から帰ると、毎日欠かさず練習に打ち込みました。

私は大選手になった自分の姿をいつも心の中に思い描き

ました。そして全国大会の決勝戦に出場しているつもりで、試合終了数秒前という場面を想定して練習しました。ボールは私の手にあり、スコアは同点です。コートを駆け抜け、ロングシュートを決めると、ヒーローになった気分です。こうして私は数えきれないほど何度も優勝しました。そのような自分の姿を心の眼で見ることはできたのです。必ずできると何度も自分に言い聞かせ、練習に練習を重ねました。そして、いつかマディソンスクウェアガーデン（ニューヨーク市にある有名な屋内総合スポーツ競技場）で試合をするのを夢に描きました。マディソンスクウェアガーデンは当時、バスケットボールの世界最高のひのき舞台であり、そこに匹敵する所はほかにはありませんでした。

高校を卒業した私は、ユタ州ローガンにあるユタ州立大学のバスケットボール奨学生となりました。そして3年のときに、マディソンスクウェアガーデンで例年開かれるホリデー・フェ

ステイバル・トーナメント第1回の試合に招待されたのです。夢が実現しました。それまでずっと心に思い描き、そのために一生懸命努力してきた夢が、とうとう実現したのです。このトーナメントには、ユタ州ならびに合衆国中から集まったチームと共に、トップの2チームが招かれていました。私たちは最初の晩に、2番にランクされたチームと試合し、接戦でしたが最後の数秒で勝つことができました。私は最も得点を稼ぎ、今までになく絶好調でした。次の晩も強豪と当たり、再び接戦をものにしました。このときも私は一番多くの得点を稼ぎました。

いよいよ全国一のチームとの決勝戦になりました。緊迫した白熱戦でした。点差は多いときでも4点を越えることのない大接戦のまま、とうとう試合終了まで残り2分になりました。ユタ大学チームは4点リードしています。ボールはこちらにあり、少し時間稼ぎをねらいましたが、相手チームにパスをカットされ、そのまま得点されました。ユタ大学は残り1分半でわずか2点のリードです。私たちは再びボールをパスしながら、シュートができるチャンスをうかがいました。そして味方が走り込んでシュートしましたが、失敗でした。敵側にボールが移り、また得点されました。残り時間はあと1分。同点です。こちらにボールが来て、攻めに返ってシュートしましたが、失敗し、バウンドしたボールは相手に渡りました。残るは35秒ほどです。反則はできませんでした。なんとせっぱつまった状況でしょう。このようなとき、なぜこんなスポーツを選んだのか疑問に思えてくることがあります。相手がボールをやりとりして残り10秒ほどになると、その晩よく得点していた選手がリング下に走り込み、シュートしました。そのボールがリングのへりをつたってついに外へ落ちるのを、今もありありと覚えています。落ちたボールを味方が取って、私に投げました。私はコートの端を駆け抜けて、10メートルほど離れた所からシュートしました。ボールが入った途端、終了のブザーが鳴りました。私たちはホリデー・フェ

スティバル・トーナメントで全国優勝したのです。ブザーが鳴り終わったとき、私はふとこう思いました。「こんなことが前にあった。」そうです。あの裏庭で、今と同じことを何百回も心の眼で見たのです。練習に練習を重ねた努力の成果が実ったのです。信仰と努力に対して主は私を祝福してくださいました。

私たちは何らかの才能を伸ばしたいとか、福音の標準を守りたいという望みを抱きますが、望みを達成するためには、このような信仰を養わなければならないと思います。ただ、信仰があります、と言うだけでは不十分です。自分で努力し、実践しなくては手に入れることはできません。牛に追いかけられた少年が力の限り走ったように、できるだけのことをしなければならないのです。また、望みを得るにふさわしい者となり、信仰の眼を養ってください。これは、あなたが心にしっかり植えつけなければならないのです。そして、自分は何をしたいか、どうしたらそれができるかを知る必要があります。

あなたは何をやり遂げたいのですか。どんな人間になりたいですか。道徳的に清くなりたいですか。徳を身につけて、幸せになりたいですか。薬物やたばこ、アルコール、ボルノグラフィーなど、現代社会に蔓延する腐敗から遠ざかりたいですか。もし信仰の眼を養うならば、誘惑や不幸な出来事に遭っても、正しい選択ができるでしょう。なぜなら、あなたはもうすでにその選択をしているからです。覚えておいてください。決断を下すときというのは、戦いの最中ではなく、実際に敵に会うよりずっと前なのです。また、目標を達成するためには進んで必要な努力をしなければなりません。

今決心をしておくと、皆さんのこれからの人生は大きく変わります。本当の幸福と心の平安は、正しい事柄を選択する人にもたらされるのです。皆さんが信仰の眼を養い、何事をするに当たっても励ましと導きを得られますように。

□



私が選んだ本

ロバート・エベリー・グレイ Jr.

「今年から皆さんに順番で授業の初めに、今までに一番感動した本を紹介してもらうことにします」と、文学の教師のプロチカ先生が言いました。

私は何を発表しようか迷いました。その当時、私は母と西ドイツのボンに住んでいて、9年生になったところでした。リュウ・ウォレスの「ベン・ハー」にしようかと思いました。でもそれが本当に今までに一番感動した本でしょうか。

いいえ違います。それまでに一番感動したのは、母と私にバプテスマを施してくれたふたりの宣教師から何年前にもらった本、モルモン経でした。

しかし私は学校中でたったひとりの末日聖徒でした。聖書とは違って新しい聖典であるモルモン経を、はたしてクラスで紹介できるのでしょうか。

私はモルモン経を読み、祈り、それが確かに神聖な書物であるという確信を得たときのことを思い出しました。

私の考えを話すと、母は、正しいと思うことをしなさいと励ましてくれました。それから大仕事が始まりました。物語のようにして、リーハイ一家のエルサレム出発から、モルモン経の説明を始めることにしました。よく祈って考えると、適切な言葉が次々と頭に浮かび始めました。神が答えてくださったのです。

順番を待っている間に気づいたことは、ほかの生徒の多くは何かしらサタンや暗い問題を取り扱った本を紹介していることでした。そこでなごのこと、主を擁護したいという気持ちが強くなりました。

とうとう私の番が来ました。普通みんなは初めに本の表題を黒板に書くのですが、私は教師に許可をもらって、書名を最後まで伏せておくことにしました。みんなをびっくりさせたかったのです。

母があとになって話してくれたのですが、私の発表があった当日、発表がうまくいくように、またみんなが私の話をよく聞いてくれるようにと、母は朝から昼近くまでずっと祈ってくれていたのです。母の祈りは本当に効き目がありました。最初、リーハイの示現や荒野の旅のことを説明

し始めたときは、「聖書だ、聖書だ!」と茶化したがる生徒がいたのですが、急に全体が静かになり、モルモン経の歴史を落ち着いて滞りなく話すことができたのです。主のみたまが、まるで手を伸ばせば触れることができそうなほど身近に感じました。

20分ほどで発表が終わったときには、教室は静まり返っていました。そのあとプロチカ先生が生徒たちに感想を聞きました。みんなは口々に私をほめ、そのような宗教書を学校で紹介した勇気をたたえてくれました。

教会のことや母と私の改宗についてもっと話してほしいと言ってくる人もいました。また、放課後、何人かの生徒はモルモン経を欲しいとさえ言ったのです。

その日以来、今も親しく交際している友達何人かできました。後に人々の前で私をかばってくれた友人たちです。数年後に私がスペインで伝道したときにも手紙をよごし、私を励ましてくれました。

それから数週間が過ぎ、同じ教師の歴史の授業で、古代アメリカの文明について勉強することになりました。

宿題をしていたある晩のことです。クラスでもう一度モルモン経のことを話したいという強い望みを感じました。そこで私はひざまずいて祈り、その機会をお与えくださいと天父に願いました。祈り終わると、再びモルモン経についての話を準備しなければならないという気持ちになりました。

翌日、プロチカ先生が授業を始めたとき、私は手をあげました。ところが先生は、私が口を開く前に私を見つめてこう言ったのです。「そうそう、ロバート。私は昨晚きょうの授業の準備をしていたときに、ふとあなたのことを考えました。そして、あなたがモルモン経についてもっと話をしてくれるのではないかと思ったのです。そうではありませんか。」

今度は、キリストが古代アメリカを訪れたことを中心に話しました。白い神、ケツアルコアトルの伝説が載っている本を引用し、キリストとこのインディアンの神とが明らかによく似ていることを説明しました。そしてもう一度、キリストがアメリカ大陸の民を本当に訪れて確かに福音を教えられたと、友達や教師に証したのです。

私が話を終わると、プロチカ先生は黒板に、「モルモン経は古代アメリカ文明の成立を解明する最高の学説である」と書き、それを各自のノートに写すように言いました。大成功でした。うれしくて飛び上がりたい気持ちでした。神様は祈りを聞いて答えてくださいます。本当に、神様は奇跡を起こしてくださいます。そして、ご自分の目的を達成するために人々の心を和らげてくださるのです。□

1989年6月の大管長会メッセージ

キリストを思う

大管長

エズラ・タフト・ベンソン

ジョージ・アルバート・スミス大管長は、まだ子供のころに、自分の人生を大きく変えるひとつの体験をしました。その体験について彼はこう書いています。

「私がまだ少年で13歳のころ、ブリガム・ヤングアカデミーに通っていた。……そこにいた1年の間にいろいろなことを聞かされたが、今となってはそのほとんどを忘れてしまった。しかしただひとつ、決して忘れることのできない話がある。……ある日、メーザー教授が次のような話をした。『皆さんは自分の行ないだけでなく、心の中に抱くその思いに対しても責任を問われるでしょう。』

私はまだ少年で、自分の思いを治める習慣が身についていなかった。どうしたらよいのだろうか、私はそのことでずいぶん頭を悩ませた。……それから1週間か10日ほどたつて、メーザー教授が言わんとしたことに思い当たった。……なぜ自分の思いにまで責任を問われるかという、この世の生涯を終えるときに、その人の人生は日々の思いが集積されたものになっているからである。この言葉は私の生涯を通じて豊かな祝福となり、様々な状況の中であつて、正しからぬ思いを抱くことのないように力を与えてくれた。それはこの世の働きを終えたときに、私を形作るの自分自身の思いであるということを肝に銘じていたからである。」「(「人々と福音を分かち合う」pp. 62-63)

人格の基となる習慣

思いは行ないの基となり、行ないは習慣を形作ります。そして習慣は人格を築き、人格は私たちの永遠の行く末を決定するのです。

ベンジャミン王はこの原則をよく理解していました。彼が偉大な説教の終わり近くで述べた言葉が、モルモン経に

は次のように書かれています。

「終りにのぞんで、私は罪を犯す手段をみなあげてお前たちに話すことはできない。罪を犯す手段方法はいろいろあつて数えつくすことができないほど多いからである。」
(モーサヤ4:29)

そして最後に、自分自身と自分の思いに注意しなければならないと勧告しています。(モーサヤ4:30参照)

キリストは復活の後にアメリカを訪れ、こう言われました。

「見よ、昔の人々は汝ら^{かんいん}姦淫すべからずと記せり。されど、われ汝らに告ぐ、情欲を抱きて女を見る者は心の中^{うち}すでに姦淫したるなり。われ汝らに命ず。汝ら慎みてかくのごとき情欲^{おの}を己が心の中に抱かざるようにせよ。」(IIIニーフアイ12:27-29)

なぜそのような情欲を心の中に抱くのでしょうか。聖書には、「人となりはその心に思うそのままであるからだ」と書かれています。(欽定訳箴言23:7)

祝福の源となる思い

人間の心は舞台にたとえることができます。その舞台では一度にひとりの人しか演ずることができません。私たちが愛している主は、この舞台の上に良い思いを立たせようとしておられます。もちろんそれは祝福の源^{もと}となる思いです。一方私たちが憎むサタンも、舞台の片袖から悪い思いを押し立てようと躍起になっています。それは私たちにのろいをもたらす思いです。

私たちはこの舞台の監督です。どちらの思いを舞台に立てるか自分自身が決めるのです。主が私たちに、ご自分と同じように完全な喜びを得てほしいと願っておられるこ

とを忘れないでください。サタンはすべての人を、自分と同じみじめな有様にしようとしています。どちらの思いを受け入れるかを決定するのは、各自の責任です。私たちは選択の自由を与えられていますが、選択の結果まで思いどおりにすることはできません。人となりは、心の中の舞台に常にどのような思いを立たせるか、すなわち何を思うかによって決まるのです。

ときには、この舞台からなかなか悪い思いを追い出せないこともあるでしょう。ボイド・K・パッカー長老は、そのために靈感あふれるシオンの歌を歌うようにと提案しています。故ブルース・R・マッコンキー長老は、心の中で開会の歌を歌ってから、自分自身に向けて説教をするようにと勧めています。マッコンキー長老は、自分が話した説教の中で最も良かったのは、自分自身に向けた説教だったと語っています。

自分の心の中の舞台を、サタンの思うままにさせてはなりません。多くの場合、サタンは私たちが気づかないうちに、心の中に忍び入ってきます。それに気づいたらすぐに、悪い思いを追い出すようにしなければなりません。イエスにならない、その場できっぱりと誘惑をはねのけてください。サタンの狡猾な説き伏せに逐一耳を傾ける必要はありません。

高潔な思い、貴い思いを心の中に蓄え、それらを意のままに舞台の上に立たせるのは、私たちに与えられた素晴らしい特権です。主も荒野で3つの大きな誘惑を受けたときに、即座に、ご自身の記憶の中に蓄えてあった聖句を引用してサタンにお答えになりました。

人生で最も大切な問い

主は「何を^{おも}念うとも、念々われを見るべし」と言われました。(教義と聖約6:36)これこそ、主に似た者となるための唯一の方法です。

主は弟子たちに、「^{なんじ}汝らはいかなる人物にてあるべきか」と問いかけられた後で、みずからこう答えられました。「汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(IIIニーファイ27:27)主と同じ人物になるには、常に主を思わなければなりません。私たちは聖餐を受けるときに、「御子を常に忘れぬことを約束します。(モロナイ4:3;5:2;教義と聖約20:77,79)

私たちはキリストのような人物になることを求められていますが、そのためには、キリストと同じ考えを持たなければなりません。心に思うことが自分自身を形作るからです。

パウロは聖徒を迫害するためにダマスコへ向かう途中、天から光がさすのを見、主のみ声を聞きました。そのときパウロはひとつの簡潔な質問をしました。しかし、「主よ、わたしがどうするのをお望みですか」(欽定訳使徒9:6)というその真摯な^{しんし}問いかけは、彼の人生を変えました。そして、主に向かってこの問いかけをする人は皆、自分の人生を変えることができます。この世に生きる私たちにとって、「主よ、わたしがどうするのをお望みですか」と問いかけるほど大切なことはほかにありません。私は皆さんに、この問いかけを人生で最も大切なこととして心に留めるよう強く呼びかけたいと思います。

私たちは自分の思いについて、また何に思いを向けるかについて責任があります。私たちはキリストに思いを向け、

キリストへの思いを心の中に満たさなければなりません。

キリストについて学び、その歩みにならうようにとの呼びかけ以上に、心をわきたたせるすばらしいチャレンジはありません。イエス・キリストは私たちの「模範」として地上での生涯を送られました。キリストは天父と私たちの仲保者です。キリストは偉大な贖いの業^{あがな}を成し遂げ、私たちが主の恵みにより、また自分自身の悔い改めと正しい行ないによって、全き喜びを得、昇栄できるようにしてくださいました。キリストはみずからすべてのことを完全な形で成し遂げ、そのうえで私たちにも、天父とご自身と同じように完全な者になるようにと命じておられるのです。

(III ニーファイ 12:48 参照)

「イエスならどうされるだろうか」、「イエスは、私に何を望んでおられるのだろうか」と自問するのは非常に大切なことです。主の道を歩むことこそ、人生最高の偉業です。主に近い生活をする人こそ、真の成功を収めた人といえます。

私は主が実在のお方であり、私たちを愛しておられることを知っています。主を離れて成功を収めることはできません。しかし、主と同じ道を歩む人は決して人生につまずくことはありません。

神は、私たちが自分の力でなし得る以上に、私たちの生活を実りあるものにしてくださいます。今より後、皆さんが日々キリストを思い、キリストについて学ばれるように、また勇気をもって主の道を歩み、主に望まれていることを行なうことができますように、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 私たちは自分の行ないだけでなく、心に思うことについても責任を問われる。
2. 思いは行動の基となり、行動は習慣を形作る。また習慣は人格を築き、人格は私たちの永遠の行く末を決定する。
3. 主は私たちに、ご自分と同じ完全な喜びを受けるようにと望んでおられる。一方サタンは、すべての人を自分と同じみじめな有様にしようとしている。
4. ベンソン大管長は、「主よ、わたしがどうするのをお望みですか」という質問より大切な問いかけはほかにないと述べている。

話し合いを進めるために

1. 思いを制し、キリストにならった生き方をすることについて、自分の考えを述べる。
2. 心に思うことによって、行動が決まり、どのような人間になるかが決まるという点について、担当家族の考えを聞く。
3. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのに、よい聖句や言葉はないだろうか。
4. 話し合いをより充実したものとするために、前もって家長と話し合っておく必要はないだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

1989年6月の家庭訪問メッセージ

「それだからあなたがたも 完全な者となりなさい」

目的：完全を目指して努力する。

十リストは弟子たちに、ご自分と御父のように完全な者となるように、と命じられました。(マタイ5：48；IIIニーファイ12：48参照)しかし、この戒めはとてもむずかしく思えるかもしれません。自信をなくしてしまう人もいるでしょう。また、自己の完成のむずかしさに思い悩んだ末に、奉仕よりも、自分を美化することに心を奪われてしまうような人もいます。

モロナイは次のように教えています。「キリストの御許^{みもと}に来てキリストによって全くなれ。すべて神のみこころに背くことを捨てよ。……勢いと心と力とをつくして神を愛するならば……あなたたちはこの恵みを受けてキリストにより全くなる。」(モロナイ10：32)

主を愛し、主に仕え、戒めを守る人は、「キリストによって全くなる」ことができます。そして逆境の中にあっても、平安と力を感じることができるのです。重荷に耐える力が強められ、ほかの人の重荷を軽くする助けもできるようになります。(ガラテヤ6：2；モーサヤ18：8-10；24：14-15, 21；アルマ33：23参照)

私たちは、完全な者になるという点において、予言者ジョセフ・スミスの例から、慰めを得ることができます。主はあるときジョセフ・スミスにこう勧告されました。「汝更に急ぐことなく……与えられたる力と方法以上に働くことなかれ。」(教義と聖約10：4)これは私たちにも言えることです。力と方法以上に働くことは求められていないのです。また今すぐに、すべての面で完全になるように求められているわけでもありません。ブルース・R・マッコンキー長老はこう述べています。「日の栄の王国に救われるに

は、完全な者にならなければなりません。しかし、現世で完全になれる人はだれもいません。それができたのは主イエスだけです。主はすべての人に勝るお方です。イエスは神の御子でした。……『キリストにより全くなる』とは、ひとつの過程です。」(『年度講話1976』1977年, pp. 399-400)

完全な日を過ごすという監督のチャレンジを受け入れて、この過程が実際にどのようなものかを学んだ人々がいます。ある若者は、朝聖典を読むとその日一日が楽しく過ごせることを学びました。また、病気の会員を見舞って大きな喜びを感じた夫婦もいました。(『完全な日』『聖徒の道』1989年4月号, pp. 10-14参照)

私たちは主の助けにより、少しずつ完全になっていくのです。マッコンキー長老は次のように述べています。「きょうから始めて、明日はもっとよく戒めに従うようにします。そして恵みに恵みを受け、階段を一步步昇りつめ、成長し、完全な人間になるのです。」私たちに求められているのは、「きょうから始め」ることです。□

訪問教師への提案

1. IIニーファイ31：19-20を読み、完全な者となる過程について、この箇所にはどのようなことが書かれているか話し合う。
2. 何かの戒めについて、前よりもよく従えるようになったという経験があれば、それを話す。訪問先の姉妹にも、同じような経験について話してもらう。(『家庭の夕べアイデア集』pp. 7-23, 55-70参照)

真理の光

アジア地域会長会第二副会長

ロイデン・G・デリック

昨晩、カムトンホールでバプテスマ会が開かれました。バプテスマを受けたのは、2日前に香港に到着した合衆国海軍のニミッツ号の3人の乗組員でした。乗船中に教会のことを知り、仲間の船員に教会のレッスンを受けたいと頼みました。そして、モルモン経を読み、この教会が真実であると確信し、バプテスマを受けたいと申し出たのです。この内のふたりは、20代前半から半ばの既婚者で、もうひとり、19歳の独身青年でした。バプテスマ会は、本当にすばらしいものでした。

その内のひとりが、回復された福音が真実であるという証をみたまの力によって得たと話しました。それから全員で賛美歌『戦い止むまで』（讃美歌173番）を歌いました。そのとき「兵士冠を見よや」という歌詞を「水兵冠を見よや」と変えて歌いましたが、それはこの水兵たちにとって、とてもふさわしい言葉でした。なぜなら、3人には、本当に輝かしい冠が待ち受けていたからです。会場には「われらは楽しき」という歌声が広がりました。このバプテスマ会は、私にとっても忘れられない貴重な思い出となりました。

バプテスマを受けた後、3人は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として確認され、地上における神の王国の一員となりました。バプテスマは非常に神聖な神権の儀式であり、よく日の光栄の王国へ入る門であると言われます。神権の儀式はすべて「約束の聖きみたま」により承認されなければなりません。ただし、この承認は主の戒めを守らなければ得られず、もし罪を犯せば、失われてしまうものです。しかし、慈悲深

い主は、私たちすべてに悔い改めの原則を与えてくださいました。間違いを犯してしまったときは、バプテスマ会で歌った賛美歌の歌詞のとおり、冠を受けるにふさわしくなれるよう悔い改めなくてはなりません。また、私たちは聖餐を受けることにより、バプテスマの誓約を新たにします。もし自分の間違いを心から悔い改めるならば、救い主の贖いの犠牲を通して、罪が清められ、新たな出発をすることができます。ですから聖餐式は、単なる行事としてではなく、自分自身を清めるための過程として考えなければならない重要なものなのです。

3人は確認の儀式で聖霊を授かり、罪を犯さない限りいつも聖霊を伴侶とすることができるといふ祝福を受けました。彼らに福音の原則が真実であるという証を得させたのも、このみたまの力でした。神から与えられたこの賜は、地上のいかなる宝よりも貴重なものです。

バプテスマ会が終わると、3人の新しい会員は権能ある人によってアロン神権を授けられ、祭司の職に聖任されました。アロン神権は備えの神権であって、メルケゼデク神権を受け、永遠の生命を目指して進む前に受ける神権です。その後、聖典を勉強し、祈り、教会指導者から召された責任を果たすことによって自分がふさわしいことを証明し、バプテスマの誓約を忠実に守るならば、メルケゼデク神権の長老の職に聖任されます。

バプテスマを受けた若い19歳の水兵の心には、清く美しい女性を探し、やがて神殿で結婚し、現世および来世にわたる結び固めを受けようという気持ちがわいてきま

した。また、結婚しているふたりは、妻に福音を伝え、やがてバプテスマと確認の儀式、そして聖霊を受けられるように、妻に準備をさせようと思い立ちました。そのような準備ができると、それぞれの夫婦は、忠実である限り、主の宮居でしか受けられないメルケゼデク神権の完全な祝福にあずかることができます。永遠にわたる夫婦や親子の結び固めの祝福はそのひとつです。神殿で受けるこのような祝福は、日の光栄の王国へ昇栄するための第一歩に過ぎません。こうして、もし忠実であるならば、家族はひとつとなって永遠に共に住み、天父の光栄に共にあずかることができるのです。

夫婦の結び固めを受けると、永遠の生命が得られるという保証を得たと思込む人がいますが、これは誤りです。永遠の生命を得るためには、神の戒めを忠実に守り、終わりまで耐え忍ばなくてはなりません。主はこのような言っておられます。「おおよそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、^{しか}而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、『みたま』により聖められて……わが父のもてるすべて〔を〕……与えらるべし。」（教義と聖約84：33、38）

召しを全力を尽くして遂行する人とは、神の王国を建設するために協力する人です。また、権能ある人々から与えられた教会の責任を受け、勤勉に、最善を尽くしてその責任を果たす人です。同じ信仰の道を歩む友として私たちに仲間入りした3人に、こう申しあげたいと思います。「岩の多いこの世の危険な浅瀬^{いかり}を無事に航海し、永遠の生命という港へ錨を下ろしてください。」

チャーチニュース

新伝道部長のご紹介

●任期を終える伝道部長

モーリス・R・ステレット (日本神戸伝道部)

シゲキ・モリヤマ (日本大阪伝道部)



日本神戸伝道部

ダグラス・松森

ダ グラス・松森伝道部長 (41歳)。召しを受けたときは、高等評議員を務めており、ソルトレーク・グラナイトステーク第一ワード部に所属していた。これまで監督、支部長、副支部長、長老定員会会長、ステーク宣教師、ソルトレーク宣教師訓練所講師などを歴任している。また、1966年から1969年までは、日本で専任宣教師として伝道している。1976年ハーバード大学において、法学博士の学位を取得し、弁護士の職に就いていた。ユタ州ソルトレークシティ出身で、両親はトム・カツミ・松森とキョウコ・サカノである。ミチコ・バージニア・佐藤姉妹と結婚し、5人の子供に恵まれている。

松森姉妹は召しを受けたとき、初等協会副会長を務めていた。これまで扶助協会副会長、扶助協会教師などを歴任し、初等協会では指揮者として働いたこともある。日本での伝道の経験もある。姉妹は、カルフォルニア州サンフランシスコ出身で両親は佐藤龍猪と平西登美子である。



日本大阪伝道部

西原里志

西 原里志伝道部長 (37歳)。召しを受けたときはステーク部長を務めており、広島ステーク五日市ワード部に所属していた。これまで副伝道部長、支部長、副地方部長、インスティテュート指導主事などを歴任している。また、1973年から1975年までは、日本東伝道部で専任宣教師として伝道している。広島県出身で、両親は西原良男 (前東京神殿副神殿長) と津野地キクノである。田中則子姉妹と結婚し、5人の子供に恵まれている。

西原姉妹は召しを受けたとき、ワード部扶助協会の副会長を務めていた。これまで若い女性会長、日曜学校教師などを歴任している。また1973年から1975年まで兄弟と同じく日本東伝道部で伝道している。姉妹は熊本県出身で、両親は田中藤市と村上紀美代である。

各地のたより

艱難を神聖なものにして

東京東ステーク部・ステーク部長 赤松成次郎

神 崎ステーク部長が地区代表に召されたことを知らされたのは今年の1月でした。私は、それまで彼を通して与えられた数多くの教えに対し、主への感謝の思いを新たにするとともに、次にどなたがステーク部長に召されても、その方の指導に従って、主のみ業に働き務めていこうと決心しました。

数週間が過ぎ、ステーク部大会の日を迎えました。2月4日土曜日に、私は十二使

徒定員会会員のダリン・H・オークス長老から面接を受けるようにとの連絡をいただき、小岩のステーク部センターに向かいしました。

オークス長老の面接を受け、自分がステーク部長に召されたことを告げられたときは本当に驚き、身が引き締まる思いがしました。しかし、私の長所も短所もすべてご存じの主から与えられた召しであることを承知していましたので、つつしんで引き受



●赤松ご家族。(左から道成兄弟、敏成兄弟、美和姉妹、義成兄弟、美緒姉妹、奥様の孝子姉妹、赤松ステーク部長)

けさせていただくことにしました。

思えば私と家族はこれまで主の導きと助けによって生かされてきました。

子供たちの生死にかかわる出来事、特に長男の死をはじめとする子供たちの病氣、事故などの出来事は、つらく苦しいものでしたが、そのさなかにあっても主から多くの導きと教えをいただきました。

3日しかもたないと医師に宣告されながら、心臓病の痛々しい体で11カ月生き長らえてくれた長男、ベッドに縛りつけられ1カ月間点滴だけで耐え抜いた次男、また涙ながらに必死に助けを祈り求める妻の姿。これまでそのような姿を見てきて思うのは、家族のきずなの貴さ、苦しみを耐え忍ぶことの大切さ、また、逆境にあっても、すべてを感謝して受け入れることの大切さです。主から与えられる鍛練は当座は苦しいよ

うに思えますが、主はそれを耐え忍ぶ人の「艱難を神聖なものにし……利益にして下さる」(II ニーファイ 2:2) のです。

私はこれまでの様々な体験を神聖なものにし、悲しむ人々と共に泣き、重荷を共に背負っていくことが、自分に課せられた大切な務めのひとつであると信じています。

オークス長老との面接の中で、「自分の良いところは何か」と聞かれました。何と言うべきか即座に答えを見つけることができませんでしたが、私はこのときの経験を通して、会員の皆さんが、謙虚な気持ちを忘れずに、自分の中にある善い資質を見だし、天父の子供としての自尊心を強めることができるようお手伝いした

いと強く願っています。

かつてマッケイ大管長は、どんな人であっても、自分より優れた点をその人の中に見いだすことができると言われたことがあります。教会員か否かを問わず、すべての人が神の子であることを心に留め、相手の中にすばらしい特質を見いだすことの大切さを忘れないようにしたいと思います。

新たな召しを受けて、今思うのは、ひとりでも多くの人々と共に主のみもとへ戻るよう、何よりもまず主の教えを学び、主のみこころに添った働きをしなければならぬということです。(あかまつ・しげじろう 1944年生まれ)

真の教会に導かれて

広島ステーキ部・ステーキ部長 上野敏幸

1972年5月、大阪の阿倍野筋を歩いているとき、ふたりのアメリカ人宣教師に教会へ誘われました。自分なりの宗教観を持っていたので、翌日彼らと話し合うつもりで教会へ出かけました。ジョセフ・スミスの話、また見証者の証とモルモン経の存在には驚かされました。

それから授業が終わると毎日のように教会へ行き、話を聞きました。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」(ヨハネ3:5)との聖句に心を動かされ、私はバプテスマを受けたいと思いました。18歳の貧しい学生である私のために、宣教師はとても親切にしてくれ、バプテスマの許可を得るため私の実家へも電話をかけてくれました。バプテスマ会で水からあがったとき、体全体が光に包まれたように感じたことを今でもはっきりと覚えています。

翌日の安息日にアロン神権を授けられ、いつの日か聖餐の準備ができるようにと願いました。数カ月後、初めて聖餐の祝福をしたときには、祝福の言葉をそらで覚えていながらも、緊張して声が震えたものです。

バプテスマを受けた直後に、学校の友人から「クリスチャンになったのか」と言わ

れ、心が沈み始めました。高校時代から新約聖書を読んでいたのに、イエス様について簡単な知識はあったのですが、「クリスチャン」と呼ばれるほど自分とイエス様との関係を正確には理解していませんでした。ショックでした。このままでは教会にとどまることはできないと思い、それから一生懸命聖典を学び、祈りました。

夏休みになり、東京でのカンファレンスに参加した私は、そこでセミナーでイエス様の存在についてやっと確信を得、イエス様の贖いを自分自身のこととして理解し始めました。そして伝道、神殿結婚、家庭を持って自立することなどの自分の人生設計に思いをめぐらしました。

その後、大阪にステーキ部が組織されたときに、当時十二使徒であったベンソン長老にお会いできた感動は忘れられません。アロン神権者として教会を掃除していたときに長老は来られ、握手してくださったのです。それ以来、教会の掃除ほど祝福の多い奉仕はないと思っています。

同様に、専任宣教師として奉仕した2年間は、祝福にあふれたすばらしい経験でした。もちろん苦い経験もありました。当時はまだJMT Cがなかったので、伝道の現



●上野ご家族。(子供たち左からめぐみちゃん、あゆみちゃん、のぞみちゃん、なるみちゃん、奥様の節子姉妹、上野ステーキ部長)

場での様々な問題に多少の当惑を感じることもありました。ただやみくもに働くだけでは実りは得られないこと、また人々が改宗するのは宣教師の技量によるのではなく、すべて神様の導きによるものだということもわかりました。

伝道からの帰還後も、就職、結婚を通して数えきれないほどの祝福をいただきました。4人の子供たちに恵まれた今、人を愛することの大切さをよく理解できるようになりました。私自身、改宗してから多くの兄弟姉妹の愛を全身でいっぱいに受けてきました。今新しい召しにあって、さらに思いを尽くし、霊を尽くし、心からの愛をもって奉仕しようと決心しています。

愛のあるところにみたまは宿ることを証します。「クリスチャン」と言われることに誇りを感じることができるよう、努力していきたいと思っています。(うえの・としゆき 1953年生まれ)

2月, 3月に召された宣教師の名簿

JMTC第117期生 13人 後列左から1~10 前列11~13



2月 117期生 13人

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 平野 早苗	東京東S/鎌ヶ谷W	岡山伝道部
2. 下総 千春	秋田D/大館B	神戸伝道部
3. 横山 希代	札幌S/厚別W	名古屋伝道部
4. 入江 美保	福岡S/井尻W	神戸伝道部
5. 大江 悦子	福岡S/北九門W	神戸伝道部
6. 小松原 乃	東京北S/川越W	大阪伝道部
7. 兼城 佳代子	鹿児島D/宮崎B	岡山伝道部
8. 吉田 育代	大阪北S/高槻W	東京南伝道部
9. 木下 由紀	福岡S/井尻W	仙台伝道部
10. 木下 妙子	名古屋S/名東南W	東京北伝道部
11. 水戸 部仁	東京北S/浦和W	岡山伝道部
12. 砂川 栄三	福岡山D/石垣B	仙台伝道部
13. ピーター・カン・トン	ホンコンS/シャウギーワンW	名古屋伝道部

3月 118期生 26人

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 渡辺 寿加保	岡山S/岡山W	仙台伝道部
2. 瀧沼 史朗	札幌S/厚別W	神戸伝道部
3. 矢田 尚士	大阪堺S/羽曳野W	福岡伝道部

そは、見よ
畑は早白くして
刈り入れを
待つが故なり。

(教義と聖約4:4)



118期生

JMTC第118期生 26人 後列左から1~26



S: スターキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

4. 溜 衛 之	東京南S/千束W	岡山伝道部
5. 小池 勇	札幌西S/新琴似W	東京南伝道部
6. 屋良 幸広	沖縄S/普天間W	仙台伝道部
7. 恒吉 智美	大阪S/枚方W	東京南伝道部
8. 大谷 広樹	三重D/松阪B	東京南伝道部
9. 木村 陽亮	大阪北S/京都洛南W	東京北伝道部
10. 大友 辰弥	仙台S/長町W	岡山伝道部
11. 上野 なおみ	横浜S/横浜中央W	岡山伝道部
12. 大江 真実子	大阪S/枚方W	札幌伝道部
13. 福田 はるみ	三重D/伊勢B	神戸伝道部
14. 田中 啓子	北陸D/高岡B	東京北伝道部
15. 宇治 真奈美	釧路D/釧路B	東京南伝道部
16. 佐鳥 聡	高崎S/前橋W	名古屋伝道部
17. 一丸 奈津子	熊本D/熊本北B	大阪伝道部
18. 松本 久美子	岡山S/鳥取B	東京南伝道部
19. 宅島 みつえ	大阪北S/茨木W	名古屋伝道部
20. 鈴木 紀子	静岡S/浜松W	札幌伝道部
21. 吉田 明	町田S/厚木B	福岡伝道部
22. 岡本 晴也	町田S/町田第1W	福岡伝道部
23. 橋本 好弘	大阪北S/大津W	名古屋伝道部
24. 安田 正彦	仙台S/山形W	大阪伝道部
25. 高山 秀一	東京北S/川越W	岡山伝道部
26. 田中 武夫	新潟D/新潟B	仙台伝道部

編集室から

原稿を募集しています。

■各地のたよりの原稿を常時募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本誌を読まれての感想文などをお送りください。なお、投稿の際、

必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名)、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただきますことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

■お詫びと訂正

2月号ローカルページのJMTC114期生の名前と写真に誤りがありました。写真左より泉姉妹、真喜志姉妹、鈴木姉妹、吉岡姉

妹、仁木姉妹、板谷姉妹、奥間姉妹、西長老、牧口長老、嵩原長老、福田長老です。また嵩原長老は「たかはら」ではなく「たけはら」、そして西長老の出身ワード部は松千代ワード部ではなく八千代ワード部の誤りです。お詫びして訂正いたします。

■あて先: 〒106東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会
「聖徒の道」編集室 Tel 03 (444) 5264

「八日ののち、イエスの弟子たちはまた
家の内におり、トマスも一緒にいた。
……イエスがいってこられ……トマスに言われた、
『手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。
信じない者にならないで、信じる者になりなさい。』
トマスはイエスに答えて言った、『わが主よ、わが神よ。』
イエスは彼に言われた、『あなたはわたしを見たので信じたのか。
見ないで信ずる者は、さいわいである。』

ヨハネ20：26—29